千葉県八千代市

不特定遺跡
発掘調査報告書Ⅵ

東山久保遺跡　b 地点

小板橋遺跡　c 地点

令 和 元 年 度

八 千 代 市 教 育 委 員 会

千葉県八千代市

不特定遺跡
発掘調査報告書Ⅵ

東山久保（とうざんくぼ）遺跡　b地点

小板橋（こいたばし）遺跡　c地点

令和元年度

八千代市教育委員会

1. 東山久保遺跡b地点近景

2. 小板橋遺跡c地点近景

例　言

1　本書は平成 16 年度，千葉県不特定遺跡発掘調査事業の補助金の交付を受け実施した 2 件の発掘調査の報告書である。調査後から平成 30 年度まで随時，本整理作業を実施し，平成 31 年度(令和元年度)に千葉県不特定遺跡発掘調査事業の補助金の交付を受け刊行した。

2　本書に収録した遺跡と調査の概要は，以下のとおりである。

遺跡名	遺跡 No.	所在地	調査期間	調査面積 ㎡	事業者／調査原因	調査担当
東山久保遺跡 b 地点	24	八千代市島田台 字東山久保 989-1	H17. 1. 24 ～2. 22	160	染谷不動産(株)／宅地造成	秋山利光
小板橋遺跡 c 地点	245	八千代市大和田 322-18 外	H17. 3. 10 ～3. 18	225/ 1,514.03 拡張 107	荒井壽明／医療施設建設	秋山利光

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，八千代市教育委員会が実施した。以下調査・整理体制である。

平成 16 年度

調査主体者	萩原　康正	八千代市教育委員会　教育長
	三浦　幸子	八千代市教育委員会　生涯学習部 部長
	鈴木　賢治	八千代市教育委員会　生涯学習部 次長
事務担当	菅井　茂穂	八千代市教育委員会　生涯学習課 課長
	岩佐　秋男	八千代市教育委員会　生涯学習課 主幹
	植村　昭勇	八千代市教育委員会　生涯学習課文化財保護班 主査
調査担当	秋山　利光	八千代市教育委員会　生涯学習課文化財保護班 主任文化財主事

平成 30 年度～令和元年度

調査主体者	加賀谷　孝	八千代市教育委員会　教育長(平成 30 年 11 月 30 日まで)
	小林　伸夫	八千代市教育委員会　教育長(平成 30 年 12 月 1 日から)
事務担当	森　竜哉	八千代市教育委員会　教育総務課 主幹(文化財担当)
	向後　喜紀	八千代市教育委員会　教育総務課文化財班 主査補
整理担当	秋山　利光	八千代市教育委員会　教育総務課文化財班 主任主事 (文化財班は平成 31 年 4 月から文化・スポーツ課に組織変更)

4　整理は資料の収集・整理，遺物の復元，実測，土器の断面実測・拓本を宇都洋子，岩崎千代子，杵島由希，立松紀代美，山下千代子が行い，完形土器・石器等の実測・トレース・写真撮影・本書の執筆・編集を秋山が行った。

5　本書で使用した地形図等は，下記のとおりである。掲載には各原図を加筆・修正し，一部を使用した。

第 1 図　国土地理院発行「佐倉」1/50,000（平成 10 年発行）

第 2 図　大日本帝国陸地測量部発行「白井」「神崎」1/20,000（明治 36，37 年測図・明治 40 年発行）

第 3 図　八千代市発行「八千代都市計画基本図」1/2,500 №1-6, 1-9, 2-4, 2-7, 5-3, 6-1（平成 22 年撮影・

平成 24 年修正）　原図を正位置のまま使用し，真上方向が座標北となる。

第 4・5 図　八千代市教育委員会発行「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 17 年度」『第 8・9・10 図』（平成 18 年発行）

第 6 図　基準点及び方眼杭を設定した日東測量(株)が作成した現況図を基にした。

第 16 図 昭和 62 年に実施した a 地点の遺構配置図は，日本測地系による平面直角座標に基づいて作成されていた。b 地点の区域の形状を基準に a 地点の地形図に合成した。

第 17 図 大日本帝国陸地測量部発行「下志津原」「習志野」1/20,000（明治 36 年測図，明治 42 年改正・明治 43 年発行）

第 18 図 八千代市発行「八千代都市計画基本図」1/2,500 №20-7, 20-8, 24-1, 24-2（平成 22 年撮影・平成 24 年修正）　原図を正位置のまま使用し，真上方向が座標北となる。

第 24 図 八千代市発行「八千代都市計画基本図」1/2,500 №24-1, 24-2（平成 22 年撮影・平成 24 年修正）　原図を正位置のまま使用し，真上方向が座標北となる。

6　本書の遺構実測図における用例は，以下のとおりである。

(1) 東山久保遺跡の実測は，日東測量株式会社に委託し設置した世界測地系による平面直角座標（第Ⅸ系）を取り付けた方眼杭を基準に実施している。そのため，第 2 章で用いる図中の北方位は，同座標における座標北を表す。

(2) 遺構図面の縮尺は，竪穴建物跡を 1/80，カマドを 1/40，その他各図の対象の状況に合わせて縮尺を変更することとし，それぞれ図中に記した。

(3) 各図中の記号等は図中に凡例を示した。

(4) 第 2 章東山久保遺跡 b 地点における竪穴建物跡の平面規模の計測は，各壁の中点と対角の中点とを結んだ壁間の距離を図上で計測したものである。

7　本書の遺物実測図における用例は，以下のとおりである。

(1) 図面の縮尺は基本的には以下のとおりとした。

完形土器実測図　1/4　　土器拡影図・土製品実測図　1/3　　石器・石製品実測図　2/3～1/3

(2) 図中の網掛けは以下のとおりとした。

(3) 図中の挿図番号の後に遺物の出土地点を示す注記内容を記載した。

8　(1) 今回報告する「竪穴建物跡」は，調査当時，「竪穴住居跡」の呼称を使っていたが，近年「竪穴建物跡」が一般的に使われていることもあり，呼称を変更して記載した。

(2) 表又は本文中の〔　〕は現存値，（　）は復元推定値を表している。

9　本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面，写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

目　　次

口絵
例　言・目　次・挿図目次・表目次・図版目次
第１章　八千代市の地形と調査遺跡 …… 1
第２章　東山久保遺跡　ｂ地点 …… 3
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　遺跡の立地と概要 …… 4
1. 遺跡の立地　2. 周辺遺跡　3. 確認調査
第３節　本調査の方法と経過 …… 7
第４節　検出された遺構と遺物 …… 9
1. 検出遺構と出土遺物　2. その他の出土遺物
第５節　まとめ …… 19
第３章　小板橋遺跡　ｃ地点 …… 21
第１節　調査に至る経緯 …… 21
第２節　遺跡の立地と概要 …… 22
1. 遺跡の立地　2. 周辺遺跡
第３節　調査の方法と経過 …… 24
第４節　検出された遺構と遺物 …… 25
1. 検出遺構　2. 出土遺物
第５節　まとめ …… 28
図版１～6(図版１～4　東山久保遺跡ｂ地点，図版５・６　小板橋遺跡ｃ地点)
抄録　巻末

挿 図 目 次

第１図　掲載遺跡位置図 …… 1
東山久保遺跡　ｂ地点
第２図　東山久保遺跡周辺の地形 …… 3
第３図　東山久保遺跡ｂ地点と周辺遺跡 …… 4
第４図　ｂ地点確認調査のトレンチ配置と検出遺構 …… 6
第５図　ｂ地点の土層と１号土坑 …… 6
第６図　本調査遺構検出状況 …… 8
第７図　１号竪穴建物跡 …… 10
第８図　１号竪穴建物跡 床面撤去状況 …… 11
第９図　１号竪穴建物跡 カマド …… 11
第10図　１号竪穴建物跡 遺物出土状況 …… 12
第11図　１号竪穴建物跡 出土遺物 …… 14
第12図　２号竪穴建物跡 …… 16
第13図　２号竪穴建物跡 遺物出土状況 …… 17
第14図　２号竪穴建物跡 出土遺物 …… 17
第15図　その他の出土遺物 …… 19
第16図　東山久保遺跡ａ・ｂ・ｃ地点遺構検出状況 …… 20

小板橋遺跡　c地点

第17図 小板橋遺跡周辺の地形 …… 21
第18図 小板橋遺跡c地点の位置 …… 22
第19図 小板橋遺跡c地点のトレンチ配置と検出遺構 …… 23
第20図 調査区の土層 …… 24
第21図 1号溝・2号溝・3号溝 …… 26
第22図 1号土坑 …… 27
第23図 小板橋遺跡c地点 出土遺物 …… 27
第24図 小板橋遺跡全地点遺構検出状況 … 28

表目次

東山久保遺跡　b地点

第1表 1号竪穴建物跡 出土遺物(1) …… 13
第2表 1号竪穴建物跡 出土遺物(2) …… 15
第3表 2号竪穴建物跡 出土遺物 …… 18

小板橋遺跡　c地点

第4表 小板橋遺跡c地点 出土遺物 …… 27

図版目次

口絵　1.東山久保遺跡b地点近景　2.小板橋遺跡c地点近景

東山久保遺跡　b地点

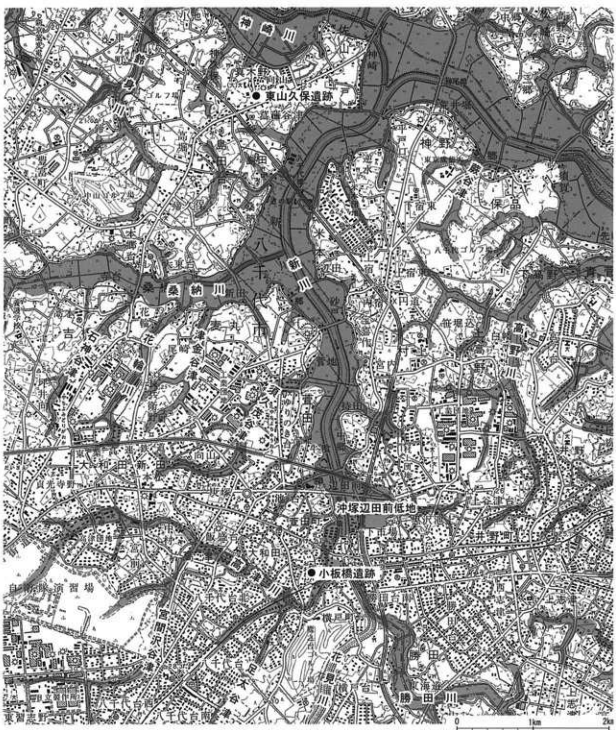
図版1　調査区近景・作業風景・1号竪穴建物跡検出状況他
図版2　1号竪穴建物跡
図版3　2号竪穴建物跡
図版4　出土遺物

小板橋遺跡　c地点

図版5　調査区近景・遺構検出状況他
図版6　遺構検出状況・出土遺物

第１章　八千代市の地形と調査遺跡

八千代市は都心から東へ約 30km，千葉市の市街地中心部から北へ約 13km，千葉県の北西部地域で印旛沼西岸に位置する。印旛沼は戦後の干拓で現在の位置まで後退しているが，以前は少なくとも八千代市平戸付近まで湖面が及んでいたことは，明治期に作成された迅速測図でわかる。市域は房総半島の内陸部にあり，地形は平坦な下総台地とそれを樹枝状に開析する河川や谷津で構成されている。



第1図　掲載遺跡位置図

市域の下総台地は，三つの地形面で構成されている。下総上位面は台地全体に広く分布し，最も上位に位置する。下総下位面は神崎川の両岸や新川の左岸(西岸)，元の印旛沼の南岸などに幅 1～3km の範囲で分布し，中位に位置する。千葉段丘面は元の印旛沼の南岸，神崎川の右岸(南岸)，桑納川の右岸(南岸)，新川の左岸(西岸)，高津川の右岸(南岸)，勝田川の両岸などにみられ，複数の段丘面で構成される下位の段丘面群である。

市域の中央を南北に貫く新川（印旛放水路）は，上流域では勝田川，下流域ではかつて平戸川と呼ばれており，本来，印旛沼水系に属していた。千葉市の長沼から大日一帯を水源とし，南から北に流下し，その左岸から高津川（八千代１号幹線）・桑納川・神崎川が合流し，平戸で流れを東に変え，印旛沼に流れ込む。市内を流れるこれらの河川は，市域の台地を大きく大和田・睦・阿蘇の３つの区域に区分している。

戦後，大和田排水機場の完成と大和田で東京湾水系の花見川への疎水が開かれ，台風などの増水時には印旛沼･新川の水を大和田の排水機場により花見川から東京湾に流し,印旛沼周辺の洪水を防止している。この疎水を掘削した横戸周辺は印旛沼・利根川・霞ヶ浦・太平洋水系と東京湾水系との分水界といえる。

東山久保遺跡は本市域の北部の島田台地区に位置し，印西市などとの市境を流れる神崎川の右岸(南岸)の台地上に立地している。

小板橋遺跡は本市域の南部，大和田地区に位置する。市の中央を南から北に向かって流れる新川に北西から高津川が大きく廻り込んで合流する地点の西岸の台地上に立地している。

参考文献

杉原重夫(1970)　「下総台地西部における地形の発達」『地理学評論 43 12』
佐々木茂ほか(1981)　「八千代市の地形・地質」『八千代市文化財総合調査報告 Ⅰ』
第2章　文献1 八千代市教育委員会 2006 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書　平成17年度』
文献2 八千代市教育委員会 2010 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書　平成21年度』
文献3 八千代市遺跡調査会 2008 『千葉県八千代市　真木野向山遺跡　－埋蔵文化財発掘調査報告書－』
文献4 八千代市 1991 『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』
文献5 千葉県 2013 『千葉県の歴史　資料編　考古2(弥生・古墳時代)』
文献6 八千代市教育委員会 1995 『平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』他
文献7 財団法人千葉県文化財センター 2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3 －八千代市間見穴遺跡－』他
文献8 八千代市教育委員会 1986 『千葉県八千代市平戸道地遺跡　－農業道路施設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
財団法人千葉県文化財センター 2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2 －八千代市道地遺跡－』他
文献9 八千代市教育委員会 2009 『千葉県八千代市 道地遺跡ｅ地点・平戸台８号墳 』他
第３章　文献10 八千代市遺跡調査会 2008 『千葉県八千代市　小板橋遺跡　－ｂ地点埋蔵文化財発掘調査報告書－』
文献11 八千代市教育委員会 2013 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書　平成24年度』
八千代市教育委員会 2013 『千葉県八千代市　小板橋遺跡ｄ地点』
文献12 八千代市教育委員会 2015 『千葉県八千代市　公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ　向山遺跡ｃ，ｆ地点，
ヲイノ作遺跡ｂ地点，小板橋遺跡ｅ地点，阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点』
八千代市教育委員会 2014 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書　平成25年度』
八千代市教育委員会 2015 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書　平成26年度』
文献13 八千代市教育委員会 2014 『千葉県八千代市 堀場台遺跡ａ地点』他
文献14 八千代市遺跡調査会 2001 『千葉県八千代市 内込遺跡発掘調査報告書 －宅地造成に伴う埋蔵文化財調査－』
文献15 八千代市教育委員会 1982 『千葉県八千代市高津新山遺跡 －昭和56年度確認調査の概要－』他
文献16 八千代市遺跡調査会 2008 『千葉県八千代市 上ノ山遺跡 －埋蔵文化財発掘調査報告書－』他
文献17 八千代市遺跡調査会 1980 『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告 八千代市都市計画街路3-4-1 号線建設工事に伴う発掘調査報告書』他
文献18 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市 浅間内遺跡・白筋遺跡・神塚遺跡 －八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』他
文献19 財団法人千葉県都市公社 1975 『八千代市村上遺跡群　1974』

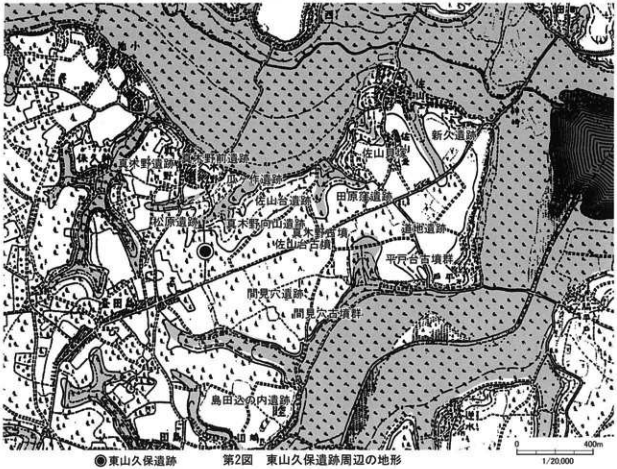
第２章　東山久保遺跡　ｂ地点

第１節 調査に至る経緯

平成 16 年 9 月 9 日付けで，染谷不動産 株式会社から八千代市島田台字東山久保 989-1 の一部　面積 2,978.07 ㎡の区域に宅地造成を目的として「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が本市教育委員会(以下「市教委」という。)に提出された。市教委は 9 月 22 日に現地踏査を行い，現況がすでに駐車場となっている状況を確認した。駐車場の造成のため，すでに地下に破壊が及んでいる可能性もあったが，照会地が埋蔵文化財包蔵地(八千代市遺跡№24(以下「市№」という。)東山久保遺跡)の区域内であり，隣接する区域での大規模開発事業で古墳時代の遺構の調査が行われている状況から，今回の区域に遺跡が展開する可能性が高いため，区域全域に埋蔵文化財が所在する旨，同年 9 月 27 日付けで回答した。

文化財保護法（以下「法」という。）第 57 条の２第１項(文化財保護法の改正により第 93 条第１項に変更される以前の条項)の規定による土木工事の発掘届が 10 月 1 日付けで提出されたため，国庫及び県費の補助を受けて行う「市内遺跡調査事業」として確認調査を行うこととなった。市教委は平成 16 年 11 月 8 日から 11 月 26 日まで確認調査を実施した。確認調査の結果，古墳時代 竪穴建物跡 2 軒，土坑 1 基が検出され，160 ㎡について保存措置が必要と判断された。(文献 1)

その調査結果を受け，市教委は事業者と協議を行い，記録保存のための本調査を実施することとなった。また，調査方法について，千葉県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議を行い，平成 17 年 1 月 7 日付けで県費補助事業(不特定遺跡発掘調査助成事業)の補助金の交付を依頼した。1 月 14 日付けで内示を



◉東山久保遺跡　　第2図　東山久保遺跡周辺の地形

受け，補助事業として本調査を行うこととなった。1 月 19 日交付決定を受け，市教委は法第 58 条の 2 第 1 項(文化財保護法の改正により第 99 条第 1 項に変更される以前の条項)の規定による発掘調査の報告を平成 17 年 1 月 24 日付けで県教委に行い，準備の整った 1 月 24 日から本調査を開始した。

また，平成 17 年 2 月 22 日付けで，作業量の増加に伴い「変更承認申請書」を提出し，事業費の増加と事業終了時期の変更を申請した。同年 2 月 23 日付けで交付の変更が決定された。

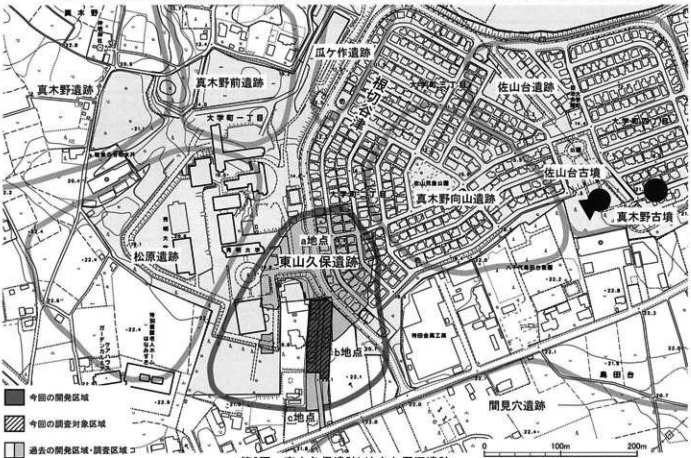
第 2 節　遺跡の立地と概要

1．遺跡の立地

東山久保遺跡は神崎川の右岸(南岸)の台地上に立地している。神崎川はこの台地の先端で新川と合流し印旛沼に流れ込む。本跡は神崎川から小規模な「根切谷津」を 300mほど遡り奥まった舌状台地上に立地する。台地平坦面は台地前面の沖積地から十数mの比高差がある。この舌状台地は台地の東西両側に開析された谷津が台地の付け根で狭まり，東西約 150m，南北約 200mの下総下位面で形成された比較的小規模な台地であった。本跡はこの小規模な台地全体を遺跡の範囲としている。

今回の調査地点は，台地の付け根付近で台地東側の谷津に面して位置していた。本地点周辺は，調査開始時点ですでに造成等が行われており，本来の地形をほとんど残していなかった。

本跡での発掘調査は，この調査が行われた平成 17 年 1 月時点で過去 1 回行われていた。最初の調査は，昭和 60 年 9 月に確認調査が行われ，本調査が昭和 62 年 1 月から同年 12 月まで 3 次にわたって行われていた。このａ地点は大規模な開発事業で遺跡範囲の大半を占めていた。遺跡の南半部中央は，保存区域と



第3図　東山久保遺跡b地点と周辺遺跡

して残されることになっていたが，現状ではあまり良好に保存される状況にはなっていなかった。現時点では，この地点の本報告がなされていないため，調査の内容を確定できないが，終了報告などからみると調査が行われた区域では，31軒の竪穴建物跡が検出されている。これらの内訳は，縄文時代中期7軒，弥生時代後期6軒，弥生時代後期から古墳時代前期が5軒，古墳時代後期が13軒のものとされている。

今回のb地点の調査後，平成20年5月南側に隣接する区域1,431.15㎡の確認調査が行われた(文献2)。このc地点の調査では，遺構・遺物等の検出はみられなかった。調査区の大半が台地の東側を開析している谷津の中に位置していた。この報告で用いられた位置図と遺構検出状況図は，出典の記載がないがb地点の確認調査報告書(文献1)から転用されており，これらの図面からすれば，c地点が谷津の中に位置することは明らかであり，当然の結果であった。

2. 周辺遺跡

東山久保遺跡(市№24)を中心とした周辺の遺跡について概観する。

真木野前遺跡(市№266)は**真木野遺跡**(市№10)から平成20年の遺跡包蔵地図改定時に分離された未調査の遺跡である。真木野遺跡は大規模開発に関連する工事で一部調査が行われている。平安時代の竪穴建物跡2軒，また同時期の土坑も確認されている。**松原遺跡**(市№11)は浅い谷津を隔てて本跡の西側の台地に立地する。約90軒の竪穴建物跡が検出され，その内古墳時代前期あるいは後期の58軒の建物跡が調査されている。**瓜ヶ作遺跡**(市№267)は松原遺跡の北側に続く，細長い低位段丘面に立地しており，33軒の竪穴建物跡と縄文時代早期の93基の炉穴などが検出されている。

本跡の東側の谷津を隔て**真木野向山遺跡**(市№23)が立地する。この遺跡は上下2段の段丘面で構成されており，上位の段丘面では，古墳時代の竪穴建物跡が1軒検出されているが，その他の遺構はほとんどみられない。この段丘面の奥に縄文時代中期の竪穴建物跡3軒と多くの土坑が検出されている(文献3)。また，低位段丘面からは，縄文時代早期の炉穴8基，古墳時代前期の竪穴建物跡21軒，平安時代2軒など上位段丘面より多くの遺構が検出されている。その東側に隣接する**佐山台遺跡**(市№22)でも同様の傾向がみられた(文献4)。上位段丘面からは縄文時代中期の建物跡7軒が検出され，真木野向山遺跡と連続する縄文時代中期の集落の一部とみられた。この段丘面には**佐山台古墳**(市№21)と**真木野古墳**(市№20)が立地する。また，低位段丘面においては古墳時代前期を中心とした約230軒の竪穴建物跡が検出され，真木野向山遺跡との連続性も伺わせた。この遺跡の東側には浅い谷津を介して，**田原窪遺跡**(市№269)が所在する(文献5,6)。田原窪遺跡の西側の浅い谷津では古墳時代前期の29軒の竪穴建物跡がまとまって検出されている。さらに，北端の台地先端部からは古墳時代後期の集落を検出している。上位段丘面には弥生時代中期の環濠集落が検出され，41軒以上の竪穴建物跡が調査された。残念ながら，これらの遺跡の内容は，報告書が刊行されていないものが多く確定的ではない。

本跡の南東側には，新川に面して広大な範囲の**間見穴遺跡**(市№28)が立地する(文献7)。間見穴遺跡は5地点で調査が行われている。これらの成果により，旧石器時代から奈良・平安時代の各種の遺構が多数検出され，各時代の集落が広域に展開している。また，この遺跡の南側の台地先端には**間見穴古墳群**(市№27)が立地し，9基の古墳が調査されている。その北東側には**道地遺跡**(市№18)が広範囲に展開している(文献8)。道地遺跡は11地点で調査が行われている。弥生時代から奈良・平安時代の集落が確認されている。同時に，8基の古墳が**平戸台古墳群**(市№19)(文献9)として確認されている。その内3基の古墳が調査されている。

3. 確認調査

本地点の確認調査の状況は，既に報告されているがあらためて簡略にまとめる。確認調査は前述のように，平成16年11月8日から11月26日まで行われた。

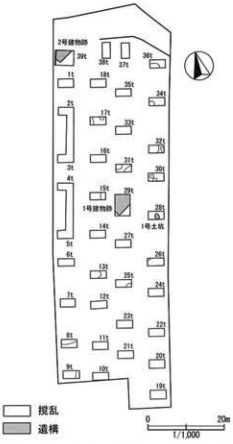
調査対象区域は2,978.07㎡であった。

現況がアスファルト舗装であったことや調査後の利用予定など事業者の事情もあり，様々な制約のあるトレンチ設定となったが，トレンチを39か所，376㎡，12.62％を掘削調査し，古墳時代の竪穴建物跡２軒と土坑１基が検出された。同時に多くのトレンチから，撹乱された痕跡も検出され，駐車場整備時に地下も相当破壊されている可能性があった。

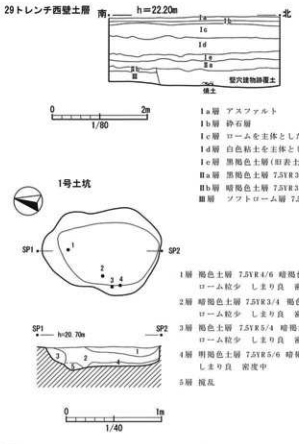
調査区の土層は，北側ではローム面まで削平され，南側では厚い盛土が検出された。駐車場整備のため整地されたものとみられた。調査区の中央付近の土層を観察したが，アスファルト面から約80cmの盛土があり，その下に旧表土が確認された。さらに，旧表土から約40cm下に遺構確認面とするソフトローム層が検出されている。また，竪穴建物跡(1号竪穴建物跡)の一部が検出され，ソフトローム上層の暗褐色土層(Ⅱb層)から掘り込まれていることを確認した。

２軒の竪穴建物跡は，確認調査の時点では時期を確定するには至らなかったが，古墳時代の土師器がみられたことから，当該時期のものと推定された。一方，ａ地点の遺構検出状況からも古墳時代後期の時期が濃厚と推察された。検出された土坑は１号土坑として，この確認調査の時点で調査が行われた。

その他の出土遺物としては，縄文土器がわずかながら出土している。前期末葉から中期初頭，中期後半などがみられた。



第4図　ｂ地点確認調査のトレンチ配置と検出遺構



第5図　ｂ地点の土層と1号土坑

第３節 本調査の方法と経過

b 地点の本調査は，2 軒の竪穴建物跡周辺の合計 160 ㎡が対象となった。

調査区域内の位置を確定するため，基準点測量を行った。公共座標を取り付けた 4 級基準点 2 点，4 級水準点，公共座標を取り付けた方眼杭 6 点，これらを基準に遺構等の測量を行った。

平面測量は公共座標を取り付けた方眼杭を基準に光波測距儀により測定し，室内作業により形状を図化した。遺物の取り上げもこれに準じている。

カマドと炉の調査は，遺構掘削後に調査をした。カマドは「キ」の字状にベルトを残し，土層を観察した。調査後，カマド設置以前の状況を明らかにするため，袖の撤去を行った。

遺構内のピットは，半裁して掘削することが可能なものは土層観察して掘削した。

また，各建物の当初の掘り方の掘削状況を把握するため，調査後床面を掘削した。

発掘調査の経緯は，以下のとおりである。

平成 17 年 1 月 24 日(月)～：重機による表土剥ぎ開始。

1 月 25 日(火)：1 号竪穴建物跡(1D)の遺構精査開始。焼土が壁際に検出。現段階ではカマド不明。

1 月 27 日(木)：1D 掘削開始。2 号竪穴建物跡(2D)遺構精査。2D は撹乱が多く，撹乱のためカマド不明。

1 月 28 日(金)：基準点測量実施。1D 遺物取り上げ開始。2D 掘削開始。2D の覆土は浅い。

1 月 31 日(月)：1D 壁検出作業。カマドらしき痕跡を確認。2D 掘削継続。床面近くから小型の壺(取上No.73)検出。焼土測定。

2 月 1 日(火)　：1D 壁床検出作業継続。カマド確認。2D 焼土撤去，壁床検出。

2 月 2 日(水)　：1D，2D 土層記録作業。

2 月 3 日(木)　：1D，2D 土層観察ベルト撤去。

2 月 4 日(金)　：1D 床面精査。主柱穴 4 か所，貯蔵穴 1 か所，その他 3 か所検出。北東壁東寄りにカマドの範囲を確認。

2 月 7 日(月)　：1D のピット半裁開始。引き続き全掘。2D 床面精査。主柱穴 3 か所，もう 1 か所は調査区域外と判断された。貯蔵穴 1 か所，カマドなく小さな炉跡を確認。一部床面が焼土化する。貯蔵穴の周りに周堤状の低い高まりを確認。

2 月 9 日(水)　：2D のピット全掘。貯蔵穴(p5)半裁掘削，土層実測後，全掘。p5 の底部より丸底の坏と小型壺出土。

2 月 10 日(木)：1D, 2D 清掃・記録写真・平面測定開始。2D 終了。

2 月 14 日(月)：1D 測定続き。2D エレベーション等測定。炉半裁。

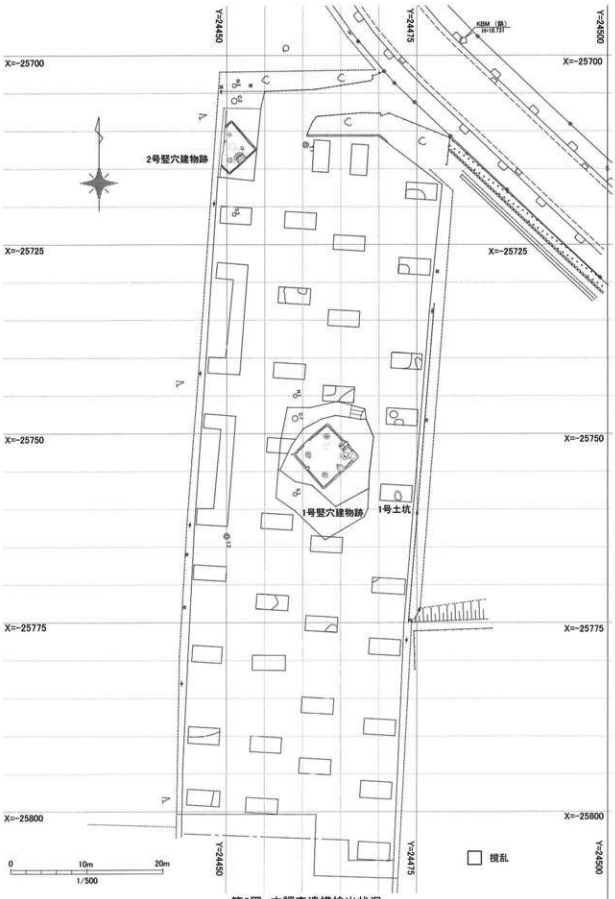
2 月 15 日(火)：1D 測定終了。カマド調査開始。

2 月 17 日(木)：1D カマド調査。

2 月 18 日(金)：1D カマド調査終了。床面撤去作業開始。

2 月 21 日(月)：1D 床面撤去作業。

2 月 22 日(火)：1Dp6 の下層調査。隅丸方形状のピットを確認。測定し調査を完了する。



第6図　本調査遺構検出状況

第４節 検出された遺構と遺物

本跡のｂ地点調査により竪穴建物跡が２軒，土坑が１基検出された。土坑は確認調査時点で遺構の内部の調査が行われているので，本報告においては，２軒の竪穴建物跡について扱うこととする。また，今回の調査では，建物跡と土坑のみの調査であり，遺構から出土している遺物以外はなかった。また，竪穴建物跡に関連すると推定される遺物以外の縄文土器等については，その他の遺物として報告する。

１．検出遺構と出土遺物

１号竪穴建物跡（第7～11図・表1,2・図版1,2,4）

・**位　　置**　遺構中心座標　X=-25753　Y=24463

・**規　　模**　北東-南西方向(カマド方向)　6m24cm　北西-南東方向　推定6m23cm

・**遺構形状**　方形　　・**主軸方位**(カマド方向)　N47゜W

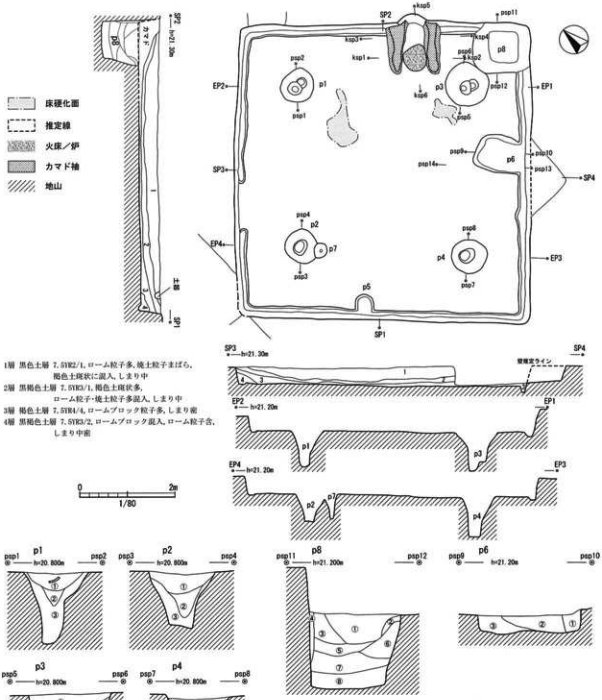
・**覆　　土**　覆土は一番深いところで48cmあり，確認面からの深さは全体的に浅い。覆土全体がほとんど均一的な土質であるが，ほぼ自然堆積と考えられる。しかし，覆土下層でロームブロック，ローム粒子が多量に混入する状況から一部に人為性も感じられた。

・**内部構造**　**壁**は北西壁でやや膨らみをもつが直線的で，各隅でほぼ直角に曲がる。また，壁面は床面から垂直に立ち上がる。**床面**はほぼ平坦に見えたが，中央部分にやや凹みが感じられた。床面を形成している土層は，ロームブロックを主体とした暗褐色土であった。床面を形成する埋め土層はみられず，ほぼ直接，床面を造り出しているようである。また，床面にしっかりと踏み固められた痕跡は観察されなかったが，北東壁側のカマド両側付近に小範囲の硬化面が２か所検出されている。

カマドが北東壁の中央よりやや東側にずれて付設されていた。カマド全体の規模は，煙道から袖端部までの長さ1m25cm，左右の袖の幅1m10cmであった。左右の袖は，最大50cmほど間をあけて設置される。左袖は長さ1m2cm，最大幅44cm，高さ24cmで，右袖は長さ1m7cm，最大幅33cm，高さ28cmが残存していた。火床は壁面より36cmほど離して，長さ55cm，幅49cmで激しく焼土化して検出された。火床を含む左右袖間の床面が周囲の床面より若干低くなっている。煙道は左右袖間の壁面にやや傾斜をつけて掘りくぼめている。下場で幅40cm，奥行き10cm，上場で幅60cm，奥行き18cmであった。カマド内部の覆土は47cmあり，全体に白色粘土粒子を多量に含み天井部の部材と思われる破片も含まれていたが，自然埋没と推定される。袖は主に褐色土により基礎を作り，白色粘土を主体として造られていた。カマドの天井部は残存していなかった。袖部を撤去するとカマドを付設するにあたって，建物の周溝を埋め戻していることが確認された。また，左側袖は煙道部内部まで入り込んでいることから，煙道を掘りくぼめた後に袖が造られたことがわかる。

柱穴は建物跡の対角線上で中心よりやや外側に４か所確認されている。p1の規模は73cm×65cmの楕円形，深さ77cm，底部が２か所みられる。p2の規模は73cm×66cmの楕円形，深さ58cm，この柱穴の南東側に小規模なp7(33cm×27cm円形，深さ52cm)が一部接している。p3の規模は92cm×92cmの円形，底部が２か所みられ，深さ80cmと外側の62cmであった。p4の規模は75cm×72cmの円形，深さ85cmであった。いずれの柱穴も土層断面から，ローム粒子や焼土粒子を混入する自然埋没の様相を呈していた。

貯蔵穴(p8)は建物の東隅に位置し，カマドに近く，p3に接する。規模は106cm×95cmのほぼ方形，深さ79cmであった。**周溝**は北西壁の中央付近で途切れる以外，壁際の直下に廻っている。前述のように



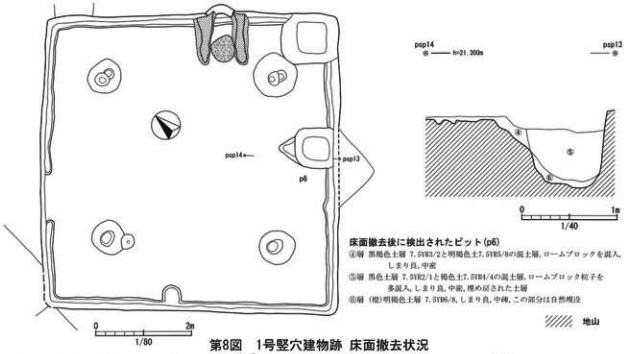
1層　黒色土層 7.5YR2/1, ローム粒子多, 焼土粒子まばら, 褐色土塊状に混入, しまり中
2層　黒褐色土層 7.5YR3/1, 褐色土塊状多, ローム粒子・焼土粒子多混入, しまり中
3層　褐色土層 7.5YR4/4, ロームブロック粒子多, しまり密
4層　黒褐色土層 7.5YR3/2, ロームブロック混入, ローム粒子含, しまり中密

p6
①層　周溝部分の土層, 褐色土層 7.5YR4/6, ローム粒子を土状に混入, しまり良, 中密
②層　黒褐色土層 7.5YR3/2, 褐色土を斑状に混入, ローム粒子多, ロームブロック少, しまり良, 中密
③層　暗褐色土層 7.5YR3/4, 褐色土を斑状に混入, ローム粒子まばら, ロームブロック少, しまり良, 中密

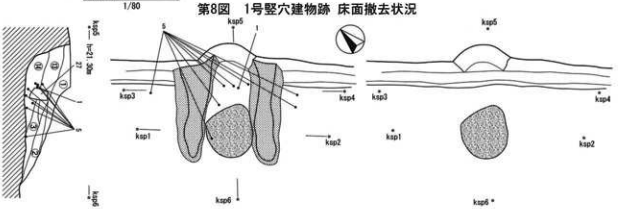
p8
①層　黒褐色土層 7.5YR3/1, ローム粒子多, ロームブロック少, 焼土粒子少, しまり良, 中密
②層　暗褐色土層 7.5YR3/4, ローム粒子多, 焼土粒子・ロームブロック多, しまり良, 中密
③層　褐色土層 7.5YR4/3, ローム粒子・ブロック多, 焼土粒子も下層に多い, しまり良, 中密
④層　明褐色土層 7.5YR5/6, ロームブロックまばら, 焼土粒子少, しまり良, 中密
⑤層　暗褐色土層 7.5YR3/4, ローム粒子・焼土粒子多, しまり良, 中密
⑥層　明褐色土層 7.5YR5/6, ローム粒子・焼土粒子多, しまり良, 中密
⑦層　褐色土層 7.5YR4/6, ローム粒子まばら, 焼土粒子少, しまり良, 中密
⑧層　暗褐色土層 7.5YR3/4, ローム粒子少, しまり良, やや粘性

p1～4
①層　黒褐色土層 7.5YR3/2, ローム粒子まばら, 焼土粒子少, しまり良, 密
②層　暗褐色土層 7.5YR3/4, ローム粒子まばら, 焼土粒子少, しまり良, 中密
③層　明褐色土層 7.5YR5/6, ローム小ブロック少, ローム粒子まばら, しまり良, 中密

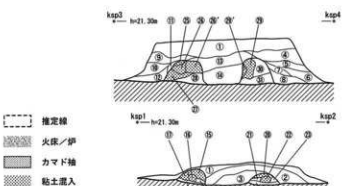
第7図　1号竪穴建物跡



第8図　1号竪穴建物跡　床面撤去状況

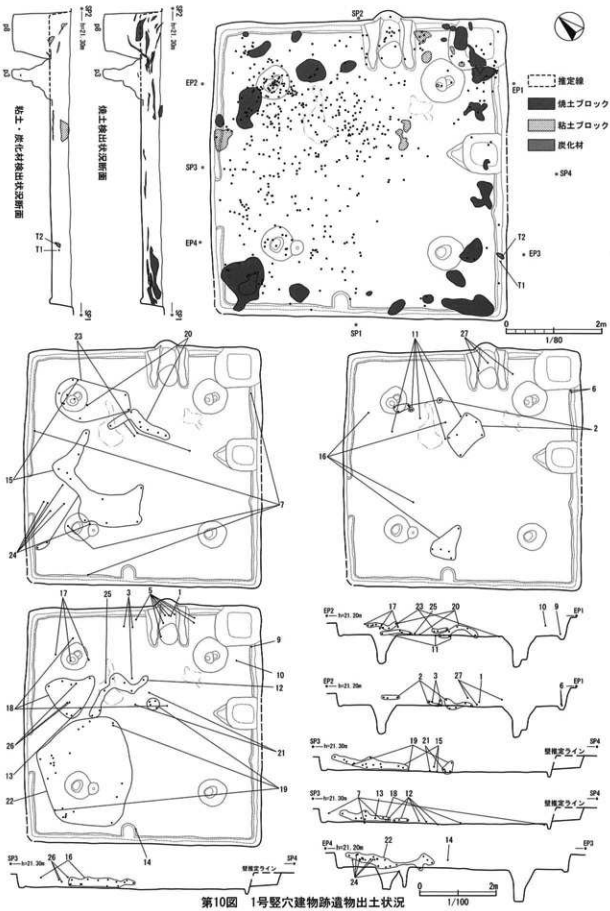


①層 黄褐色土層 10YR5/3，粘土粒子多，地土粒まばら，しまり良，密
②層 暗褐色土層 10YR3/4，粘土粒子まばら，地土粒子まばら，しまり良，密
③層 黄褐色土層 10YR5/8，粘土粒子多，地土粒子多，しまり良，密
④層 褐色土層 7.5YR4/4，ローム粒子少，しまり良，中密
⑤層 褐色土層 7.5YR4/6，灰白色粘土多く混入，しまり良，中密
⑥層 黒褐色土層 7.5YR3/2，灰白色粘土まばら，しまり良，中
⑦層 褐色土層 7.5YR5/4，灰白色粘土やや多，しまり良，中密
⑧層 褐色土層 7.5YR4/3，灰白色粘土粒子まばら，しまり良，中密
⑨層 褐色土層 7.5YR4/4，暗褐色土を斑状に混入，しまり良，中密
⑩層 褐色土層 7.5YR4/3褐色土斑状に混入，しまり良，中密
⑪層 明褐色土層 7.5YR5/8，灰白色粘土を多量混入，地土粒子含，しまり良，中密
⑫層 暗褐色土層 7.5YR3/4，ローム粒子まばら，しまり良，中密
⑬層 橙色土層 7.5YR6/8，灰白色粘土・地土粒子をまばらに混入，しまり良，中密
⑭層 明褐色土層 7.5YR5/6，粘土・地土混入，しまり良，中密
⑮層 明褐色土層 7.5YR5/6，粘土粒子混入，地土ブロック含，しまり良，極密
⑯層 にぶい赤褐色土層 5YR5/4，粘土粒子を多，地土粒子含，しまり良，密
⑰層 明褐灰色土層 5YR7/1，粘土粒子多，しまり良，密
⑱層 明褐色土層 7.5YR5/6，粘土粒子・地土粒子含，しまり良，極密
⑲層 褐色土層 7.5YR4/4，粘土・地土粒子を含，しまり良，密
⑳層 ⑱層と同じ
㉑層 ⑱層と同じ
㉒層 ⑱層と同じ
㉓層 黒褐色土層 7.5YR3/2，粘土粒子含，しまり良，中密　㉔層 ⑲層と同じ
㉕層 褐色土層 7.5YR4/6，灰白色粘土粒子混入，しまり良，中密
㉖層 灰白色粘土層(明褐灰色土) 5YR7/2，しまり良，中密
㉗層 赤変化層 明赤褐 5YR5/8，極密



㉕層 灰褐色土層 5YR4/2，粘土粒子多，地土粒子まばら，しまり良，中密
㉖層 黒褐色土層 7.5YR3/2，ローム粒子・地土粒子少，しまり良，密
㉗層 ⑲層と同じ
㉘'層 ㉘'層と同じ，にぶい橙 5YR7/4，㉘'層ほどは赤変化していない
㉙層 暗褐色土層 7.5YR3/4，粘土粒子まばら，しまり良，中密
㉚層 ⑲層と同じ

第9図　1号竪穴建物跡　カマド



第10図　1号竪穴建物跡遺物出土状況

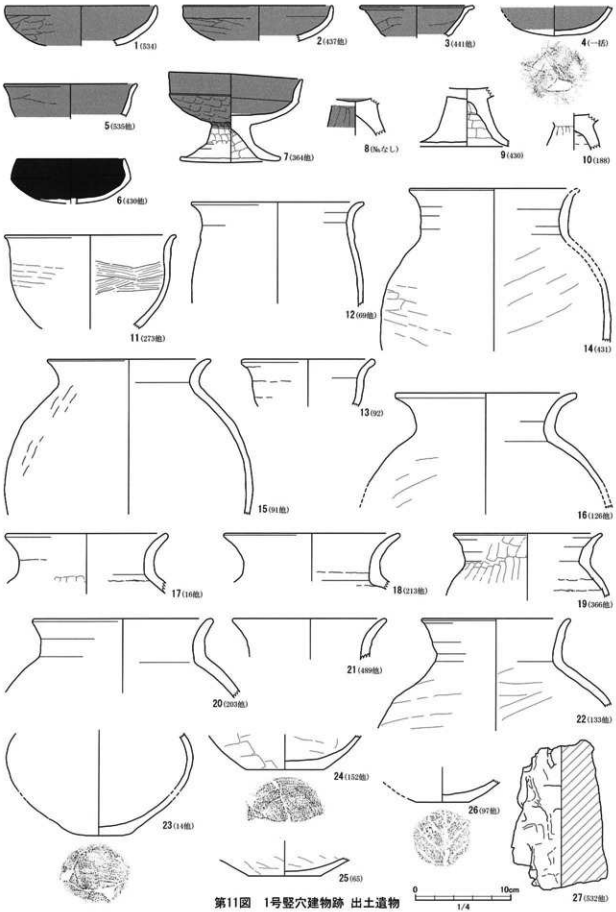
カマドの下にも廻っていた。貯蔵穴(p8)では周溝の覆土は検出されていないが、p6の上層では、周溝の覆土を確認できた。周溝の幅は15～20cm，深さ5～15cmであった。

その他のピットでは，p5が南西壁中央，周溝に接して位置していた。38cm×36cmの規模で深さは周溝と同程度の6～8cmほどとみられる。位置からすると出入口ピットと推定されるが確証はない。p6(第7図p6)は南東壁中央付近に接して位置する。規模は1m×80cmの不整形，深さ15～20cm程。用途は不明。床面撤去後p6の下にさらにピットが確認された。同様にp6(第8図p6)として調査した。規模は84cm×80cm，深さ77～72cm程で，底面に凹凸がみられる。平面形状は隅丸方形を呈する。

・遺物等出土状況　建物跡から出土する**遺物**は，土師器片528点，支脚片2点，石8，軽石2点の総数540点の位置を測定して取り上げた。その他一括で取り上げた遺物が多数ある。一括の大半は土師器と支脚片であったが，わずかに縄文土器も出土した。遺物の全般的な出土状況は，北西壁側に多く出土する傾向がみられた。特に，北隅に集中する。垂直分布からすると北～北西側からの流れ込みとみられる。

第1表　1号竪穴建物跡出土遺物(1)　　〔　〕現存の計測値・（　）復元推定値

No.	器種	計測値(mm)	部位・遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)（　）は同一個体と推定
1	土師器 坏	口径 (150) 底径 — 高さ [42]	底部他欠損 1/4～1/5	底部丸底と推定。口縁内外ナデ。体部外面全面ヘラ削り。内面はヘラナデ。内外全面に赤彩。	外 赤 7.5R4/6 内 同上	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1029 取上 534
2	土師器 坏	口径 (157) 底径 — 高さ [37]	底部他欠損 1/3	底部丸底と推定。口縁内外ナデ。体部外面全面ヘラ削り。内面はヘラナデ。内外全面に赤彩。火熱を受けて変色し，もろくなっている破片が多い。復元に歪みがあり，形状・数値は正確ではない。	外 赤褐 10R5/3 内 同上	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1024 取上 32, 41, 45, 54, 55, 85, 100, 302, 384, 484, 437, 473, ～45
3	土師器 坏	口径 (120) 底径 — 高さ [33]	底部他欠損 1/4～1/5	底部不明。口縁内外ナデ。体部外面全面ヘラ削り。内外全面に赤彩。	外 赤 10R5/8 内 赤 10R4/8	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1026 取上 50, 441, 521
4	土師器 坏	口径 — 底径 — 高さ [32]	口縁他欠損 1/4～1/5	底部丸底。口縁不明。体部外面ヘラ削り。内面は荒れがひどく成形不明。底部を除く体部に赤彩。内面底部の荒れがひどいが赤彩の痕跡がみられる。底部外面に傷がみられる。ヘラ削りにより小石を引きずったように見える。	外 赤 7.5R4/6 底 に浴 橙 7.5YR7/4 内 赤 7.5R4/6	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1090 取上 一括6点
5	土師器 坏	口径 (139) 底径 — 高さ [35]	底部他欠損 1/5	底部不明。口縁内外ナデ。体部外面全面ヘラ削り。内外全面に赤彩。	外 赤 10R4/8 内 赤 10R5/6	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1025 取上 518, 523, 526, 529, 533, 535, 539, 540, 一括
6	土師器 坏	口径 (112) 底径 — 高さ [47]	底部他欠損 1/10	底部丸底。口縁内外ナデ。体部外面ヘラ削り。体部内面はヘラナデか。外面底部を除き内外全面に黑色。	外 黑 7.5YR2/1 底 に浴 褐 7.5YR5/3 内 黑褐 7.5YR2/2	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1031 取上 430, 460
7	土師器 高坏	口径 141 底径 105 高さ 96	口縁完形 5/6	坏部の底面が立ち上がる口縁外面から内面坏体部中ほどまでナデ。坏部底面は荒れがひどい。坏体部外面ヘラ削り。脚部外面上半はヘラ削り。下半からの面はマナデ。内面上半はヘラ成形。赤彩は脚と外面坏の接合付近から坏全面，内脚底面の荒れがひどくよくわからにくいが，底面以外に赤彩が残されていた。	外 赤 10R4/6 脚 に浴 褐 7.5YR5/3 内 赤 10R4/6	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1020 取上 349, 364, 458, 511
8	土師器 高坏	口径 — 底径 — 高さ [40]	脚の一部 1/5	脚部には縦方向のヘラ削り，脚部内面にヘラナデ，赤彩の痕跡がわずかに残る。残存する坏部は荒れがひどいが，部分的に赤彩の痕跡がみられる。	外 赤 7.5R4/6 内 浅黄橙 7.5YR8/4	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1022 取上 №なし
9	土師器 高坏	口径 — 底径 94 高さ [62]	脚の一部 1/2	脚部外面荒れがひどく，整形不明。縦ふけ痕，脚先に内面までのナデ。内面にはヘラ削り。火熱受けた可能性あり。わかりにくいが赤彩されていた可能性あり。	外 明赤褐 2.5YR5/8 内 橙 2.5YR6/6	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1021 取上 430
10	土師器 高坏	口径 — 底径 — 高さ [38]	脚の一部 1/5	脚部外面縦方向のヘラ削り。内面は指頭による成形。わかりにくいが赤彩の可能性あり。	外 橙 2.5YR6/6 内 に浴 橙 2.5YR6/4	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1023 取上 188
11	土師器 甕	口径 (179) 底径 — 高さ [99]	胴部～口縁の一部 1/3～1/4	口縁内外ナデ。胴部外面横方向の粗いヘラ削り。胴部内面はヘラナデ。内外面の多くが赤い小赤彩で覆されなく，焼成の具合による脆土の変化と判断。外面下半及び内面ほぼ全面に煤が付着。	外 赤褐 2.5YR4/8 内 同上	微密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1015 取上 43, 81, 265, 273, 462, 482, 481, 187)
12	土師器 甕	口径 (180) 底径 — 高さ [31]	胴部～口縁の一部 1/6	口縁内外ナデ。胴部外面は縦方向のヘラ削り。内面は平滑に仕上げている。	外 に浴 橙～黑 5YR6/4～5YR1. 7/4 内 同上	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1016 取上 64, 69, 77, 398, 399, 444, 486
13	土師器 小型甕	口径 (140) 底径 — 高さ [40]	胴部～口縁の一部 1/5～1/6	口縁内外ナデ。胴部外面ヘラ削り。外面に輪積み痕が残る。	外 橙 2.5YR6/8 内 明赤褐 2.5YR5/8	微密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1028 取上 92



第11図　1号竪穴建物跡 出土遺物

第2表　1号竪穴建物跡出土遺物(2)　　〔　〕現存の計測値・(　)復元推定値

No.	器種	計測値(mm)	部位・遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)(　)は同一個体と推定
14	土師器 甕	口径 (178) 底径 — 高さ [170]	胴部～口縁の一部 1/2	内外面とも器面の荒れがひどく，整形痕があまり残らない。口縁内外とも周部までナデ，外面横位方向のヘラ削り，内面も上に向かってヘラ削り。	外 にぶい橙～赤 7.5YR7/4～10R4/6 内 同上	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D1 取上 431
15	土師器 壺	口径 (172) 底径 — 高さ [163]	胴部～口縁の一部 1/4	口縁内外ナデ，胴部外面ヘラ削り後まばらに縦方向のミガキ，胴部内面上部面に荒れて剥落が多く，整形痕はほとんど残らず，外面胴部下半に煤付着。	外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 淡黄 2.5Y8/4	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D13 取上 19, 136, 137, 138, 139, 232, 235, 240, 280, 359, 367, 390, 421, 433, 1237, 238, 291)
16	土師器 壺	口径 193 底径 — 高さ [120]	胴部～口縁の一部 1/6	破片の状態で火熱を受けたとみられ，破片ごとに赤変化する。そのため整形痕の残存が悪い。胴部内上から内面の口縁直下までナデ，胴部から胴部に向けてヘラ削り。	外 にぶい黄橙～にぶい橙 10YR7/2～2.5YR6/4 内 にぶい橙 7.5YR7/3	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D13 取上 20, 126, 135, 136, 405, 425, 427, 429, (61, 67, 93, 216, 217, 259, 270)
17	土師器 壺	口径 (190) 底径 — 高さ [64]	口縁の一部 1/10	口縁内外ナデ，胴部外面ヘラ削りがわずかにみられる。輪積み痕が残る。	外 赤橙 10R4/3 内 暗赤橙 10R3/3	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D10 取上 16, 46, 254, 一括
18	土師器 壺	口径 (186) 底径 — 高さ [39]	口縁の一部 1/8	器面が荒れ，整形はよっきりしないが，内外ナデ。	外 にぶい橙 5YR6/4 内 にぶい橙～赤 7.5YR7/4～10R4/8	級密 細砂粒・砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D11 取上 23, 213, 218, 272, 321, 374, 388, 449
19	土師器 甕	口径 (155) 底径 — 高さ [68]	口縁の一部 1/10	口縁外面上半から内面周部までナデ，口縁外面下半，部分的には上半からヘラ削りが残る。口縁部分は逆方向にヘラ削りされる。胴部内面に輪積み痕が残る。	外 にぶい橙 7.5YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR7/3	級密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1D7 取上 299, 307, 309, 366, 375, 402(6, 48)
20	土師器 壺	口径 (194) 底径 — 高さ [82]	口縁の一部 1/6	外面胴部上端から内面周部までナデ。	外 にぶい黄 2.5Y6/3 内 黄灰 2.5Y6/1	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D8 取上 44, 66, 203, 206, 297, 418, 439, 461, 467
21	土師器 壺	口径 (160) 底径 — 高さ [41]	口縁の一部 1/10 以下	口縁内外ナデ。輪積み痕がわずかに残る。	外 橙 2.5YR6/6 内 橙 2.5YR6/8	級密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1D6 取上 133, 489
22	土師器 壺	口径 157 底径 — 高さ [125]	胴部～口縁の一部 1/3	口縁内外ナデ。胴部も内外ともヘラ削り。	外 淡橙 5YR8/3 内 にぶい橙～赤 7.5YR7/3～10R5/8	級密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1D2 取上 133, 134, 153, 154, 156, 161, 162, 164, 165, 231, 232, 282, 284, 285, 286, 336, 345, 346, 347, 362, 384, 446,
23	土師器 壺	口径 — 底径 63 高さ [108]	胴部～底部の一部 1/4	胴部，底部内外面とも荒れがひどく整形不明。内面上部面の剥離が多い。外面の底部周辺に黒ずみ，底部のヤリ縦りが残しい。また，焼状の痕跡がみられる。故意かは不明。	外 にぶい橙～黒褐 5YR6/3～5YR2/1 内 赤橙 10R4/3	級密 微砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D14 取上 14, 44, 53, 87, 213, 214, 249, 251, 257, 380, 437, 445,
24	土師器 甕	口径 — 底径 (80) 高さ [26]	底部 1/10 以下	胴部外面下半ヘラ削り，内面ヘラナデ，底部ヘラ削り。底部から胴部まで煤付着。	外 にぶい橙～黒 10YR7/4～10YR1.7/1 内 淡黄橙～褐灰 10YR8/4～10YR5/1	級密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1D17 取上 117, 147, 152, 155, 326, 513
25	土師器 甕	口径 — 底径 78 高さ [19]	底部 1/10 以下	胴部内外面ともヘラ削り。底部ヘラ削り。内外面とも粘土の黒変化。	外 赤～黒 10R5/6～5YR1.7/1 内 灰黄～黒 2.5Y7/2～2.5Y2/1	級密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 1D19 取上 65
26	土師器 甕	口径 — 底径 55 高さ [24]	底部 1/10 以下	外面ヘラ削り。内面に煤付着。底部に木葉痕。	外 赤橙～暗赤灰 10R4/3～10R4/4 内 赤～赤黒 10R5/8～10R1.7/1	級密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 1D18 取上 97, 102, 103
27	支脚	最大径 (88) 高さ [166]	1/2	手捏ねによる成形。	外 浅黄橙 10YR8/3	疎 焼成 やや不良	整理 1D 取上 532, (296, 519)

これらの状況は地形の傾向と合致する。床面直上またはカマド内部などから出土する遺物も存在するが，ほとんどが流れ込みと判断され，直接的に建物の使用時期と同一とすることはできないだろう。

焼土は各壁際側で大小合わせて29ブロック検出されている。焼土・粘土の断面は，平面測量したデータの計測値をそのまま垂直断面にしたため，各焼土ブロックの堆積断面状況を正確に表してはいないが，大まかな傾向からすると概ね覆土の堆積状況に沿うように検出されている。また，一部の焼土ブロックは，貯蔵穴とみられるp8の内部に入り込んでいることが確認されている。

粘土は8ブロック検出されているが，大方は焼土と同様の傾向を示している。ただ2ブロックだけは，床面撤去後に検出されたものである。

炭化材はわずか2点の小片が検出された。南隅近くの壁際であった。

2号竪穴建物跡（第12～14図・表3・図版3,4）

・**位　置**　遺構中心座標　X=-25712　Y=24451

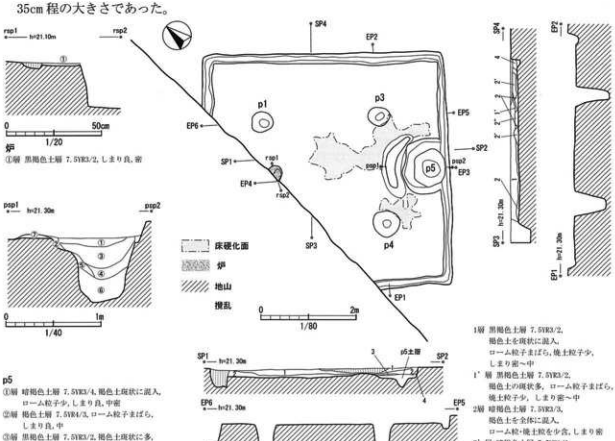
・**規　模**　北東-南西方向　推定5m60cm　北西-南東方向　推定5m80cm

・**遺構形状**　方形　　・**主軸方位**(短軸方向)　N47°W

竪穴建物の西隅側の約1/3が調査区域外となり，また，土地の境界に沿って深い溝が掘られていたため破壊を受けていた。

・**覆　土**　覆土は確認面からの深さが全体に浅く，一番深いところで20cmほどであった。部分的に焼土ブロック・焼土粒子が多量に混入される。自然埋没ではあるが，建物の廃棄後焼却や焼失が考えられる。全体に撹乱を多く受けている。

・**内部構造**　調査区で検出された**壁**は，直線的で各隅でほぼ直角に曲がる。また，検出された建物跡の深さは浅いが，壁面は床面からほぼ垂直に立ち上がる。**床面**は平坦であるが，中央部分にやや低い感じがあった。床面の下には，ほとんど掘り込みはみられなかった。直接床面を造り出しているようである。明瞭に踏み固めた**硬化面**は，南東壁側のp5(貯蔵穴と推定)付近に2か所検出されている。**炉**は建物の中央より北西寄りに位置している。境界の溝によって半分ほど破壊されているが，セクションラインで35cm程の大きさであった。



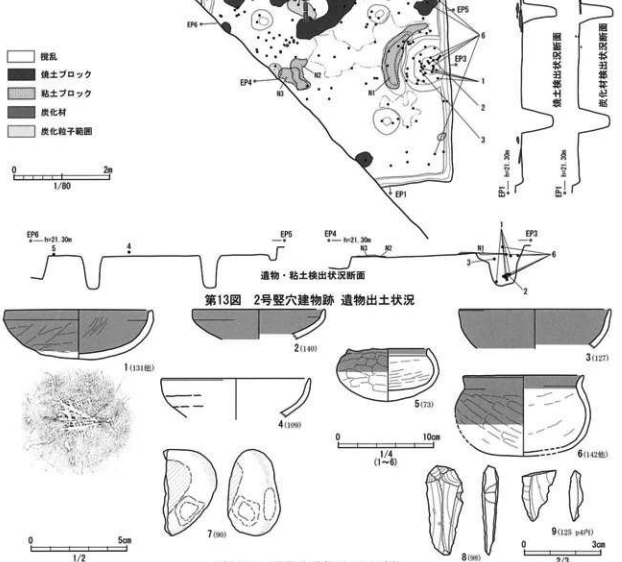
第12図　2号竪穴建物跡

柱穴は建物跡の対角線上に3か所確認されている。p1は44cm×44cmの円形，深さ69cmであった。p2の推定位置は，撹乱及び区域外で検出できなかった。p3は42cm×44cmの円形，深さ70cmであった。p4は58cm×55cmの円形，深さ67cmであった。

周溝は検出された範囲では壁際の直下に全周していた。幅15～20cm，深さ3～12cmであった。

p5は建物の南東壁際の中央，周溝に一部食い込んで位置する。このピットは2重構造になっており，上部の規模は，118cm×94cmの半円形で深さ10～20cmの皿状の形状であった。下部のピットの規模は，80cm×66cmの楕円形で，深さは床面から70cmであった。**貯蔵穴**と推定される。

床面は全体的に平坦な面で形成されていたが，部分的に他よりも硬化した部分が検出された。建物中央から南東壁側のp5周辺一帯で検出された。床面には広い範囲で焼土化している部分が検出されている。覆土中から検出された焼土との関連が推定される。p5の北西側に半月状のわずかな高まりが検出さ



第13図　2号竪穴建物跡　遺物出土状況

第14図　2号竪穴建物跡　出土遺物

第３表　２号竪穴建物跡出土遺物　　〔　〕現存の計測値・（　）復元推定値

No.	器種	計測値(mm)	部位・遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)（　）は同一個体と推定
1	土師器 坏	口径　154 底径　— 高さ　53	ほぼ完形 残4/5	丸底，口縁内外ナデ，体部外面全面ヘラ削り，内面ミガキ，外面に赤彩，底部を除き赤彩が剥脱されるが，底面の器面の荒れが激しく，調整した可能性もある。内面も底面の荒れがひどいため残りが少ない。当初は全面赤彩されていた。底面に墨状の痕が多くある。	外 暗赤 7.5R3/4 底部 橙 5YR7/6 内 赤 10R4/6	緻密 細砂粒・小砂粒やや多い 焼成 良好	整理 203 取上 130, 131, 133, 137, 141, 一括
2	土師器 坏	口径　(138) 底径　— 高さ　[32]	底部他欠損 残1/5	底部丸底と推定，内外器面の荒れが激しい，口縁内外ナデ，体部外面ヘラ削りか，残存する内外全面に赤彩。	外 赤 10R5/8 内 同上	緻密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 205 取上 140
3	土師器 坏	口径　(158) 底径　— 高さ　[35]	底部他欠損 残1/6	底部不明だが，丸底と推定。口縁内外ナデ，残存する内外全面に赤彩。	外 赤 10R4/8 内 暗赤 10R3/6	緻密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 207 取上 127
4	土師器 坏	口径　(155) 底径　— 高さ　(41)	底部他欠損 残1/5	底部不明だが，丸底か，口縁内外ナデ，輪積み痕が残る。	外 にぶい黄橙 10YR7/2 内 同上	緻密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 206 取上 109
5	土師器 小型壺 (埋小)	口径　84 最大径　106.5 高さ　56	口縁一部欠損 残9/10	丸底，短く立ち上がる口縁の内外にナデ，胴部外面にはヘラ削り，内面はヘラナデ，外面胴部上半から内面の口縁まで赤彩の痕跡がみられる。	外 暗赤 10R3/6 底部 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR7/4	緻密 細砂粒やや多い 焼成 良好	整理 202 取上 73
6	土師器 小型壺 (埋小)	口径　126 最大径　(141.5) 高さ　85.5	一部欠損 残4/5	丸底，短くやや外反して立ち上がる口縁の内外にナデ，胴部外面にヘラ削り，内面はヘラナデ，外面胴部上半から内面の口縁まで赤彩。	外 赤 7.5R4/8 底部 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい橙 7.5YR7/4	緻密 細砂粒まばら 焼成 良好	整理 204 取上 67, 81, 82, 138, 139, 142, 一括
7	敲石	幅　(55) 厚み　(54)	長さ　[94]	自然石に擦痕がみられ，敲き痕が２か所残る。			取上 90
8	フレイク	幅　14	長さ　36	厚み　6.5	黒曜石		取上 98
9	フレイク	幅　15	長さ　20	厚み　5	黒曜石		取上 125(p4 内)

れている。長さ 1m35cm，幅 42cm で，床面からの高さはわずか 5～6cm 程であった。貯蔵穴(p5)に関連する周堤状の構造とみられる。またこの「周堤」上面から粘土のブロックが検出されている。

・**遺物等出土状況**　建物跡から出土する**遺物**は，土師器片 110 点，縄文土器 31 点，黒曜石 2 点，石 4 点の総数 147 点の位置を測定して取り上げた。その他一括で取り上げた遺物がある。一括の多くは土師器と縄文土器であった。この建物の周辺は，旧地表面が深くまで削平されており，遺構内部にも撹乱が及んでいた。そのため，埋没時の流れ込み以外にも多くの混入物があったことが推測される。

遺物の全般的な出土状況は，まばらであるがやや北西壁側に多く出土する傾向がみられた。特に，北隅と p5 内に多くの土師器が出土していた。P5 内からは 1，2，3，6(第 14 図)のほぼ完形または破片の一部が出土していた。全体的には建物跡の覆土が浅く垂直分布で明確な傾向は確認できない。一方，縄文土器が覆土中から多く出土するのは撹乱が多いためであろうか。

焼土は北東壁際側で多く検出されている。断面は各ブロックの状況を正確に表してはいないが，概ね覆土の堆積状況に沿うように検出されている。

粘土は３ブロック検出されているが，前述のように p5 の「周堤」上に 8cm 程の厚みで検出されている。

炭化材はまとまったものはあまりなく，小片が焼土周辺に検出できた。

2. その他の出土遺物

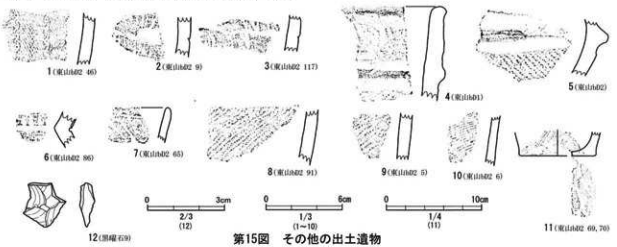
確認調査でも各トレンチからわずかであったが，縄文土器が出土していた。しかし，今回の本調査では，竪穴建物跡の周辺しか拡張していないため，建物跡以外の調査は行われていない。そのため，ここで扱うのは建物跡の覆土中から出土した遺物の中で，建物の営まれたと推定される時代以外の遺物である。遺物量が少ないため，時期の特定が困難なものが多い。

1 から 3 は縄文時代前期後半から末と推定される。1 は結節縄文が縦位に施文される。確認できた個体はこの 1 点のみであった。前期末になるであろうか。2，3 は外面に輪積み痕を残し，貝殻復縁文を施すものである。浮島式土器と思われる。

4，5 は中期後半であろう。地文に縄文を付し，太い隆帯で区画する。

6 は頸部片である。沈線を廻らし，同様の沈線を縦に入れる。7 は口縁部片である。口唇直下に縄文を押圧し，以下縄文を施文する。6，7 とも胎土に大粒の砂粒を混入。8，9 は縄文が施文される胴部片である。10 は細かい無節の縄文が付される胴部片である。11 は縄文土器の底部片である。胴部下端まで縄文が施文される。底面には土器作成時の木葉痕が残る。

12 は黒曜石のフレイクである。2 号竪穴建物跡の遺物と一緒に保管され，取り上げ時の小札に「9」としか記載されていなかった。第 15 図 2 にも「東山 b D2 9」と注記があり，遺物の取り上げ番号が重複してしまい，ここでは，所属不明とせざるを得なかった。



第15図　その他の出土遺物

第５節　まとめ

この調査の成果は，検出された遺構として古墳時代後期の竪穴建物跡 2 軒，ほぼ同時期と推定される土坑 1 基であった。出土遺物としては，遺構の主体的な時期の土師器以外に縄文土器が建物跡の覆土中に混入して出土していた。

建物跡の概要をまとめると，1 号竪穴建物跡は約 6.2m の方形で座標北に対して 47 度の傾きを持つ。主柱穴は 4 本確認されているが，p1 と p3 では大きな柱穴に 2 か所の底部が確認された。また，p2 に接して p7 が検出されている。北西壁側にカマドが付設され，貯蔵穴もカマド脇に設置されていた。カマドを撤去するとカマドの下に周溝が検出された。このことから，この建物の建設時には，カマドは付設されていなかったものと思われる。また，床面撤去後，南東壁側に検出された下層 p6 が初期の貯蔵穴ではないかと考

えられた。これらのことから，この建物は建て替えまたは増築されたものではないかと推測される。

２号竪穴建物跡は約5.7m前後の方形で座標北に対して47度の傾きを持つ。カマドは付設されず，貯蔵穴は南東壁側に設置されていた。主柱穴は３本しか確認されていないが，p2の位置は，区域外であり４本柱の建物であると推定される。

２軒の建物跡は，規模には多少差がみられるが，建物の方位は同一であり，また，内部構造的にも１号竪穴建物跡の初期状態が２号竪穴建物跡と類似していた。

２軒の建物の時期は，出土土器などから古墳時代後期と位置付けられる。建物跡の覆土中から出土した遺物は，ほとんど流れ込みであったのですべて同時期とはいえないが，あまり大きな時間差があるとは考えにくい。

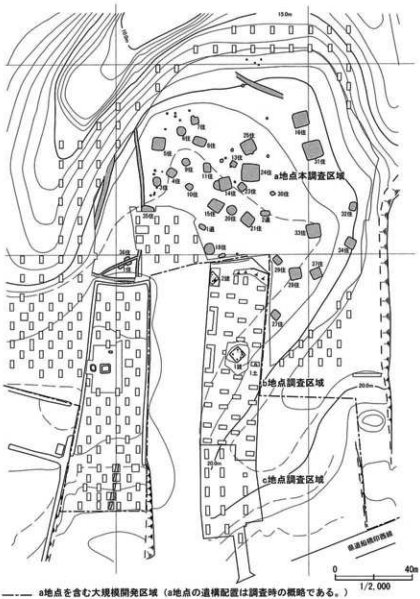
ただ，１号竪穴建物跡は建て替えまたは増築によりカマドを付設し，貯蔵穴を移設している。しかし，２号竪穴建物跡は増改築をせず，カマドの付設や貯蔵穴の移設も行わなかったようだ。

それでは，これら２軒の竪穴建物跡は，集落の中でどのように位置付けられるのだろうか。まずは，この台地全体の集落の状況を把握しなければならない。しかし，ａ地点の調査は未報告のため，それについては，今後に委ねるしかない。

ここでは，全体の概要を再度確認する。ａ地点では竪穴建物跡31軒検出されており，縄文時代中期7軒，弥生時代後期6軒，弥生時代後期から古墳時代前期5軒，古墳時代後期13軒であったとされている。

さらに，ｃ地点では遺構・遺物が検出されていない。

これらの状況から，ｂ地点の建物はａ地点の古墳時代後期の集落の展開の一部であることは間違いないが，詳細はａ地点の分析を待つこととする。



——— a地点を含む大規模開発区域（a地点の遺構配置は調査時の概略である。）

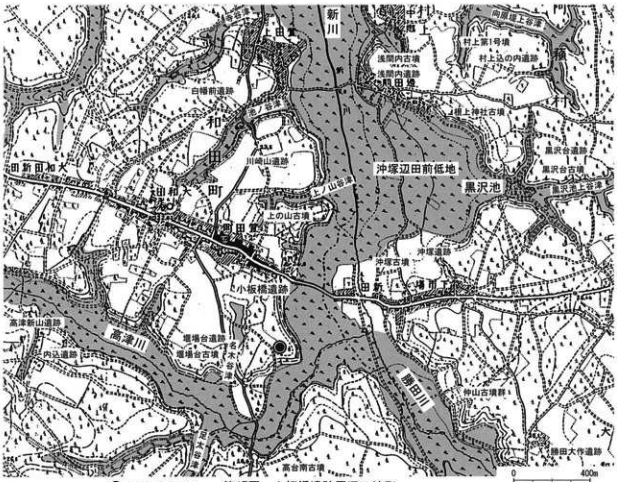
第16図　東山久保遺跡a・b・c地点遺構検出状況

第３章 小板橋遺跡ｃ地点

第１節　調査に至る経緯

平成 16 年 11 月 29 日付けで，荒井壽明氏から八千代市大和田 322-17，-18，-19，-20　面積 1,514.03 ㎡の区域に精神障害者地域生活支援センター建設を目的として「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が提出された。照会地は周知の遺跡外ではあったが，試掘を実施した結果，古墳時代と推定される溝状遺構が検出されたため，16 年 12 月 21 日付けで照会地の全域について，古墳時代の包蔵地として埋蔵文化財が所在する旨回答した。本地点は小板橋遺跡(市№245)本体からやや離れているが，同一台地上にあるため，同遺跡の一部として小板橋遺跡のｃ地点とした。

文化財保護法（以下「法」という。）第 57 条の２第１項（文化財保護法の改正により第 93 条第１項に変更される以前の条項）の規定による土木工事の発掘届が 12 月 22 日付けで提出された。調査について県教委と協議を行い，平成 17 年１月７日付けで県費補助事業（不特定遺跡発掘調査助成事業）の補助金の交付を依頼し，１月 14 日付け内示を受け，補助事業として確認調査を行うこととなった。平成 17 年１月 19 日付け，同補助金の交付が決定した。市教委は法第 58 条の２第１項（文化財保護法の改正により第 99 条第１項に変更される以前の条項）の規定による報告を平成 17 年３月 10 日付けで県教委に行い，準備の整った平成 17 年３月 10 日，確認調査を開始した。



● 小板橋遺跡ｃ地点　　第17図　小板橋遺跡周辺の地形

第2節　遺跡の立地と概要

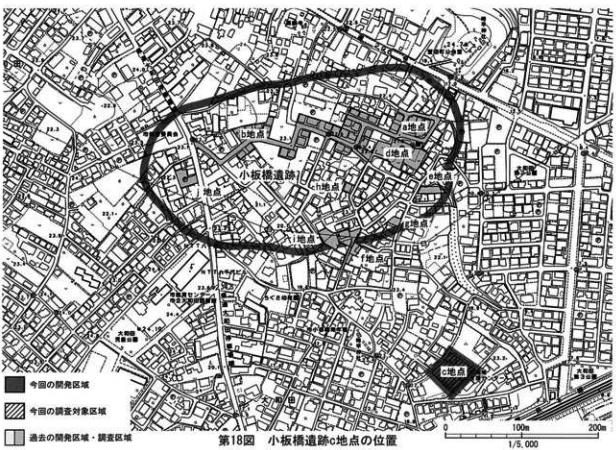
1. 遺跡の立地

小板橋遺跡は市の中央を南から北に向かって流れる新川と高津川が北西から大きく廻り込んで合流する地点の西岸の台地上に立地している。台地平坦面は下総下位面の段丘で形成され，台地前面の沖積低地から十数mの比高差がある。

本跡本体の規模は，東西約430m，南北約230mを範囲としている。c地点はこの本体部分から南南東に200mほど離れた高津川に向かって突出する小規模な台地の先端に立地する。

本跡周辺は，大正15年(1926)12月に京成本線が津田沼から酒々井まで開通すると同時に，京成大和田駅が開業したこともあり，駅周辺の開発は古くから進み，台地上にも宅地化が進んでいた。そのため，遺跡の存在を確認することが難しくなっていた。

本跡の調査は，平成30年までに10地点で行われていた。昭和55年3月にa地点の確認調査が行われ，本調査が昭和55年7月に行われた。本報告が出されていないため，正確なことはわからないが，終了報告等によると古墳時代中期から後期にかけて竪穴建物跡13軒などが検出されている。この調査に隣接するb地点は，昭和59年9月に調査が行われ，古墳時代中期末から後期初頭の竪穴建物跡2軒が検出されている(文献10)。平成17年3月に本地点の調査が行われた。平成23年11月に行われたd地点は，a地点の南側に隣接するが，古墳時代の竪穴建物跡1軒のほかに中世の地下式坑9基，土坑168基，台地整形遺構などが検出され，隣接地点と様相が大きく異なる状況が確認された(文献11)。この調査以降，6地点で小規模な調査が行われたが，縄文時代の陥穴などが検出されているものの建物跡の検出はみられなかった(文献12)。



第18図　小板橋遺跡c地点の位置

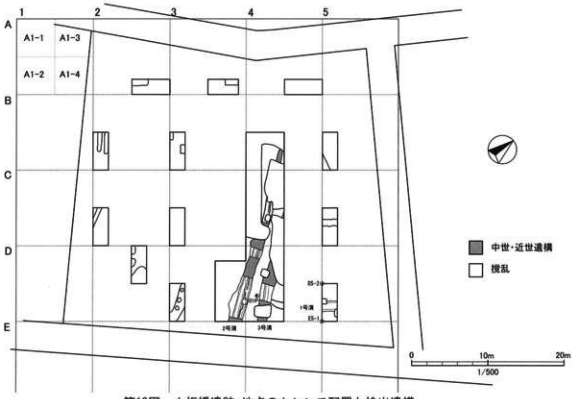
2. 周辺遺跡

小板橋遺跡の周辺の遺跡について概観する。

本跡が立地する台地の西側，名木谷津を挟んだ台地の先端に**堰場台遺跡**(市№292)・**堰場台古墳**(市№271)が立地する。昭和58年５月，個人宅で工事中に発見された石棺の一部が端緒となり，古墳及び遺跡が確認された。堰場台遺跡は古墳時代中期の竪穴建物跡２軒が検出されている(文献13)。高津川を遡ると右岸に**内込遺跡**(市№246)とその西側に**高津新山遺跡**(市№239)が低台地上に立地する。内込遺跡は縄文時代の陥穴などや古墳時代中期，後期の竪穴建物跡や奈良・平安時代の竪穴建物跡が検出されている(文献14)。高津新山遺跡は古墳時代から奈良・平安時代の集落が検出されているが，未報告のため正確な内容は不明である(文献15)。

本跡北側には**上の山古墳**(市№244)や**上の山遺跡**(市№243)(文献16)さらに上ノ山谷津を挟んで北側に舌状台地全体に広がる**川崎山遺跡**(市№241)が立地する(文献17)。上の山古墳は細長く沖塚辺田前低地に向かって突出する舌状台地の先端に２基の古墳が立地する。古墳は未調査であり，公園の一部として現状保存されてはいるが，良好な保存状況とはいえないだろう。上の山遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡が検出されている。川崎山遺跡は縄文時代の陥穴から奈良・平安時代の集落まで各時代にわたる痕跡が検出されている。

新川を挟んで台地上に**沖塚古墳**(市№265)，**沖塚遺跡**(市№215)が立地する(文献18)。沖塚古墳は主体部が貝化石の横穴式石室であった。沖塚遺跡は古墳時代中期の製鉄遺構を伴う集落である。沖塚辺田前低地の北側の台地上には**根ノ上神社古墳**(市№209)，**浅間内古墳**(市№272)，**浅間内遺跡**(市№204)などがある(文献18)。その東側に谷津を遡ると**村上込ノ内遺跡**(市№210)，**村上第１号古墳**(市№285)がある(文献19)。根ノ上神社古墳は市内でも残存する数少ない前方後円墳で市の指定文化財になっている。浅間内古墳は墳丘がほとんど残っていなかったが，残存していた周溝から前方後円墳とみられた。浅間内遺跡は縄文時代から奈良・平安時代の竪穴建物跡が多数検出されている。村上込ノ内遺跡は奈良・平安時代の集落を中心にした遺跡であった。



第19図　小板橋遺跡c地点のトレンチ配置と検出遺構

第3節　本調査の方法と経過

発掘調査は調査区の形状に合わせて任意に10m方眼を組み，グリッドを設定した。グリッドラインの縦方向(北西から南東方向)にアルファベッドで，横方向(南西から北東方向)に数字で名称を付した。10mグリッドを四分割し1～4まで小グリッドの名称を付した。

掘削は全体の状況を把握するため，グリッドに沿って，2m×5mのトレンチを規則的に設定した。当初は土層を確認するため，人力により掘削した。地表面より60cmほど掘削して，遺構の確認面とするソフトロームが検出された。遺物の明瞭な包含層などが検出されなかったため，以後は重機により表土から確認面まで土砂を除去した。

遺構が検出されたため，必要な範囲で拡張し，遺構の全体像の把握に努めた。遺構は埋没状況を把握するため土層観察のベルトを残し内部の掘削を行った。遺構内部から出土した遺物は，出土地点等を把握するため，光波測距儀により位置の測定を行った。測定には，任意で設置したグリッド方眼杭を基準とした。標高は都市計画図上の標高の明らかな地点を基準とした。土層や遺構の形状などを実測や記録写真などの撮影を行い記録保存に努めた。全体の状況を把握後，埋め戻した。

調査は平成17年3月10日から3月18日まで実施した。

3月10日(木)：機材搬入。グリッド設定。人力による掘削開始。D5-2トレンチで溝状の遺構を検出。各トレンチから多くの撹乱を確認する。D4-2トレンチでも溝状の遺構を検出。

3月11日(金)：重機によるトレンチ掘削開始。D5-2トレンチの溝状遺構を1号溝(1M)とし調査実施。D4-2トレンチ拡張。

3月14日(月)：重機によるトレンチ掘削継続。D5-2トレンチの土層堆積を確認。実測等記録。

3月15日(火)：重機によるトレンチ掘削終了。B4-2, C4-1, C4-2, D4-1, D4-2トレンチ拡張。

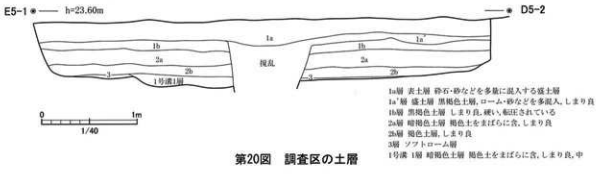
3月16日(水)：遺構確認のためトレンチ精査。遺構の形状を確認する。1号溝から3号溝まで検出。それぞれの溝状遺構掘削開始。2号溝(2M)の土層の記録実施。

3月17日(木)：3号溝(3M)の土層記録。溝の掘削継続。

3月18日(金)：2号溝掘削終了。各溝の平面測定。1号土坑の掘削，記録実施。
埋め戻しを行い，調査を完了した。

調査地点の土層

調査区の土層は，D5-2トレンチで確認した。全般的に地形は平坦で同様の様相を呈していた。1b層は旧表土層で地盤を固めるため，その上に盛り土(1a'層)して，砂や砕石など(1a層)で地表面を固めたようだ。2a，2b層は自然堆積土である。



第20図　調査区の土層

第４節　検出された遺構と遺物

この地点の調査で検出された遺構は，溝状遺構が４条，土坑３基であった。２号溝は２本の溝が並行していたため，分離できず一つの溝と認識されていたため調査中にａ，ｂ遺構と分離した。また，１号土坑(1P)は単独で検出されたため，当初より確認されていたが，２号溝の内部に２基の土坑が存在していたため，２号溝の１号土坑(2M1p)，２号土坑(2M2p)として調査している。出土遺物は溝状遺構の中からも出土しているが，各トレンチからもわずかながら出土している。

１．検出遺構

１号溝（1M）（第21図・図版6-2,3,4）

位置　D4-2～D5-2 グリッド　　**規模**　長さ〔8m70cm〕幅 60cm～1m30cm 深さ 約12cm

土層　覆土は浅く，堆積は１層のみで，自然埋没かは不明。

概略，北東-南西方向に向かう溝。２地点で検出されている溝は同一と思われるが，南西端は３号溝と接すると消失する。人為的ではあるが，掘削の時期・目的は不明。

2a 号溝（2aM）（第21図・図版5-6,7）

位置　B4-2～D3-4 グリッド　　**規模**　長さ〔23m70cm〕幅 50cm～1m70cm 深さ 約30cm

土層　覆土は浅いが，自然埋没。　北北西-南南東方向の溝。ｂ溝とほぼ同一方向で一体として検出された。この溝状遺構の両端部とも延長する可能性があり，全体は不明。掘削の時期・目的も不明。

2b 号溝（2bM）（第21図・図版5-6,7）

位置　C4-1～D3-4 グリッド　　**規模**　長さ〔16m50cm〕幅 40cm～60cm 深さ 約25cm

土層　覆土は浅いが，自然埋没。　北北西-南南東方向の溝。ａ溝とほぼ同一方向で一体として検出された。北北西側は撹乱受けているが，その先は確認できない。南南東側はさらに延長しているかもしれない。掘削の時期・目的も不明。2aM より新しい。

３号溝（3M）（第21図・図版5-6）

位置　C4-2～D4-2 グリッド　　**規模**　長さ〔15m〕幅 1m20cm～1m80cm 深さ 約35cm

土層　覆土は浅いが，自然埋没。　北北西-南南東方向の溝。２号溝とほぼ平行に掘削される。両端部とも延長している可能性があり，全体は不明。掘削の時期・目的も不明。

１号土抗（1P）（第22図・図版6-5,6）

位置　D4-2 グリッド　　**規模**　径 47cm×45cm 深さ 約57cm

土層　自然埋没。　平面形状は円形。底面には不規則な段差を持つ。明確に目的をもって掘削された土坑か疑わしい。

２号溝１号土抗（2M1p）（第21図・図版6-1）

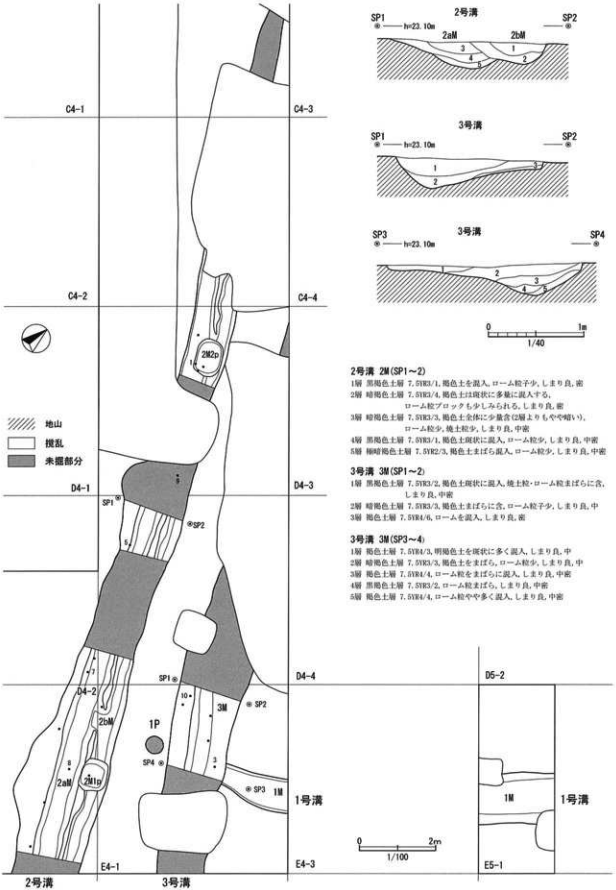
位置　D3-4～D4-2 グリッド　　**規模**　径 約90cm×70cm 深さ 不明

土層　不明　平面形状は隅丸方形。形状は安定しており，人為的な土坑と判断される。掘削された時期や目的は不明。2bM より新しいか。

２号溝２号土抗（2M2p）（第21図・図版5-8）

位置　C4-2 グリッド　　**規模**　径 約100cm×70cm 深さ 不明

土層　不明　平面形状は隅丸方形。形状は安定しており，人為的な土坑と判断される。掘削された時期や目的は不明。2bM より新しいか。



2号溝　2M(SP1～2)

1層　黒褐色土層 7.5YR3/1, 褐色土を混入。ローム粒子少, しまり良, 密
2層　暗褐色土層 7.5YR3/4, 褐色土は現状に多量に混入する。
　　ローム粒ブロックも少しみられる。しまり良, 密
3層　暗褐色土層 7.5YR3/3, 褐色土全体に少量含(2層よりも やや暗い)。
　　ローム粒少, 焼土粒少, しまり良, 中密
4層　黒褐色土層 7.5YR3/1, 褐色土現状に混入, ローム粒少, しまり良, 中密
5層　極暗褐色土層 7.5YR2/3, 褐色土まばら混入, ローム粒少, しまり良, 中密

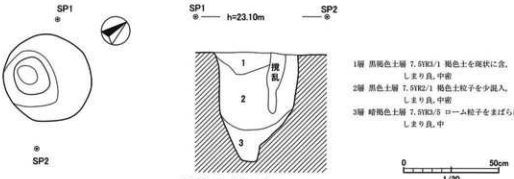
3号溝　3M(SP1～2)

1層　黒褐色土層 7.5YR3/2, 褐色土現状に混入, 焼土粒・ローム粒まばらに含,
　　しまり良, 中密
2層　暗褐色土層 7.5YR3/3, 褐色土まばらに含, ローム粒子少, しまり良, 中
3層　褐色土層 7.5YR4/6, ロームを混入, しまり良, 密

3号溝　3M(SP3～4)

1層　褐色土層 7.5YR4/3, 明褐色土を現状に多く混入, しまり良, 中
2層　暗褐色土層 7.5YR3/3, 褐色土をまばら, ローム粒少, しまり良, 中
3層　褐色土層 7.5YR4/4, ローム粒をまばらに混入, しまり良, 中密
4層　黒褐色土層 7.5YR3/2, ローム粒まばら, しまり良, 中密
5層　褐色土層 7.5YR4/4, ローム粒や中多く混入, しまり良, 中密

第21図　1号溝・2号溝・3号溝



第22図　1号土坑

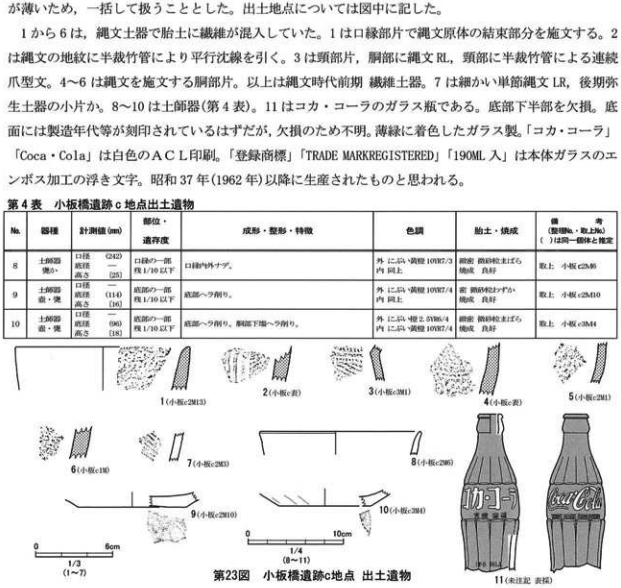
2. 出土遺物

本調査で出土した遺物の概要は，縄文土器 28 点，土師器 12 点，陶器 1 点，弥生土器か 1 点，近現代等 3 点であった。総数 45 点を回収している。縄文土器は前期の繊維土器が 18 点あり，その他は小破片のため不明であった。弥生土器も含まれているかもしれない。近現代等はコカ・コーラ瓶 1 点と粘土塊 2 点であった。検出された遺構が溝状遺構と土坑であり，同遺構の覆土中からの出土遺物でも遺構に伴う可能性が薄いため，一括して扱うこととした。出土地点については図中に記した。

1 から 6 は，縄文土器で胎土に繊維が混入していた。1 は口縁部片で縄文原体の結束部分を施文する。2 は縄文の地紋に半裁竹管により平行沈線を引く。3 は頸部片，胴部に縄文 RL，頸部に半裁竹管による連続爪型文。4～6 は縄文を施文する胴部片。以上は縄文時代前期 繊維土器。7 は細かい単節縄文 LR，後期弥生土器の小片か。8～10 は土師器(第 4 表)。11 はコカ・コーラのガラス瓶である。底部下半部を欠損。底面には製造年代等が刻印されているはずだが，欠損のため不明。薄緑に着色したガラス製。「コカ・コーラ」「Coca・Cola」は白色のＡＣＬ印刷。「登録商標」「TRADE MARKREGISTERED」「190ML 入」は本体ガラスのエンボス加工の浮き文字。昭和 37 年(1962 年)以降に生産されたものと思われる。

第 4 表　小板橋遺跡 c 地点出土遺物

No.	器種	計測値(mm)	部位・遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)(　)は同一個体と推定
8	土師器 甕か	口径 (242) 底径 — 高さ (25)	口縁の一部 残 1/10 以下	口縁内外ナデ。	外 にぶい・黄褐 10YR7/3 内 同上	細密 微砂粒まばら 地成 良好	取上 小板 c2M46
9	土師器 甕・壺	口径 — 底径 (114) 高さ (16)	底部の一部 残 1/10 以下	底部へラ削り。	外 にぶい・黄褐 10YR7/4 内 同上	密 微砂粒ｼｬｰﾌﾟか 地成 良好	取上 小板 c2M410
10	土師器 甕・壺	口径 — 底径 (96) 高さ (18)	底部の一部 残 1/10 以下	底部へラ削り。胴部下端へラ削り。	外 にぶい・橙 2.5YR6/4 内 にぶい・黄褐 10YR7/4	細密 微砂粒まばら 地成 良好	取上 小板 c3M44

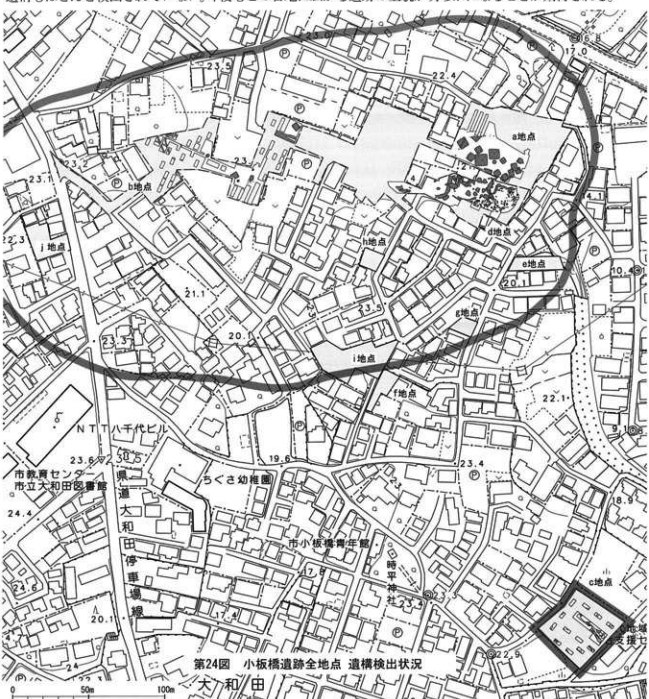


第23図　小板橋遺跡c地点 出土遺物

第５節　まとめ

今回の調査では，時期不明の溝状遺構が４条，同様に時期不明の土坑３基，その内の１基(IP)は人為的か疑わしい状況であった。出土遺物は縄文時代前期の繊維土器と土師器がわずかながら検出されている。この成果がこの地点のどのような状況を表すのか，現段階では定かではない。

小板橋遺跡としての全体像は，多様な面を持っている。ａ地点では古墳時代中期から後期の集落の一部が検出され，石製模造品などが検出されている。また，ｂ地点でも古墳時代後期の集落の一部が検出されていた。しかし，ａ地点の南側に接するｄ地点では，古墳時代後期の遺構も検出されているが，中世の台地整形遺構をはじめ多くの土坑が検出され，この地点の主体をなすようであった。隣接する二つの区域で様相が一変していた。さらに，その他の地点では，残念ながら古墳時代をはじめ，その他の時代の明瞭な遺構もほとんど検出されていない。今後もこの台地に広がる遺跡の全貌が明らかになることが期待される。



第24図　小板橋遺跡全地点 遺構検出状況

図　　版

東山久保遺跡ｂ地点　１号竪穴建物跡調査風景

東山久保遺跡 b地点

1. 東山久保遺跡b地点調査区近景

2. 遺構掘削状況

3. 遺構実測状況

4. 作業風景

5. 1号竪穴建物跡検出状況

6. 1号竪穴建物跡遺物出土状況

7. 1号竪穴建物跡土層

8. 1号竪穴建物跡 第11図No.14 出土状況

図版 2

1. 1号竪穴建物跡カマド土層(ksp5～ksp6)

2. 1号竪穴建物跡カマド完掘状況

3. 1号竪穴建物跡カマド袖断ち割り土層(ksp3～ksp4)

4. 1号竪穴建物貯蔵穴(p8)土層(psp11～psp12)

5. 1号竪穴建物貯蔵穴(p8)

6. 1号竪穴建物完掘状況(1)

7. 1号竪穴建物完掘状況(2)

8. 1号竪穴建物床面撤去作業

1. 2号竪穴建物跡遺物出土状況

2. 2号竪穴建物跡土層

3. 2号竪穴建物跡床面検出状況

4. 2号竪穴建物跡貯蔵穴(p5)土層

5. 2号竪穴建物跡p5内遺物出土状況(第14図No.1・6)

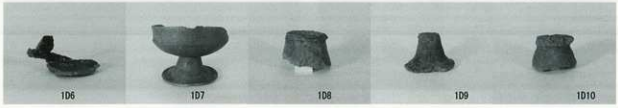
6. 2号竪穴建物跡完掘状況

7. 2号竪穴建物跡炉検出状況

8. 2号竪穴建物跡床面撤去状況

図版 4

1D1
1D2
1D3
1D4
1D5


1D6
1D7
1D8
1D9
1D10

1D11
1D12
1D13
1D14
1D15

1D16
1D17
1D18
1D19
1D20

1D21
1D22
1D23
1D23底部
1D24

1D25
1D26
1D27
2D1
2D2

2D3
2D4
2D5
2D6
2D7
2D8
2D9

他1
他2
他3
他4
他5
他6
他7
他8
他9
他10
他11
他12

小板橋遺跡 c地点

1. 小板橋遺跡c地点調査区近景

2. トレンチ掘削状況

3. 遺構検出作業

4. 溝状遺構検出状況

5. 溝状遺構掘削状況

6. 2号溝・3号溝検出状況

7. 2号溝土層(SP1～SP2)

8. 2号溝2号土坑(2M2p)

図版 6

1. 2号溝1号土坑(2M1p)

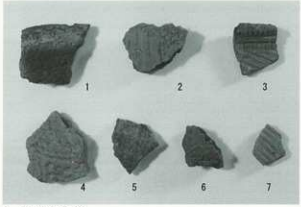
2. 1号溝(M1)検出状況

3. D5-2～E5-1土層

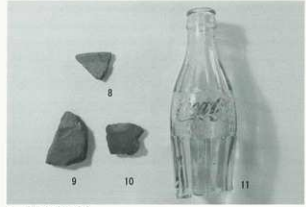
5. 1号溝(M1)完掘状況D5-1トレンチ

5. 1号土坑(1P)土層

6. 1号土坑完掘状況



7. 出土遺物(1)



8. 出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし　ふとくていいせきはっくつちょうさほうこくしょ　ろく
書　　名	千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書　VI
副 書 名	東山久保遺跡ｂ地点　小板橋遺跡ｃ地点
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田 138-2　　Tel 047-483-1151(代表)　047－481-0304(直通)
発行年月日	西暦２０２０（令和２年）３月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
東山久保遺跡 ｂ地点	八千代市 島田台字東山久保 989-1	12221	24	35 度 46 分 16 秒	140 度 6 分 1 秒	本調査 20050124～20050222	160	宅地造成
小板橋遺跡 ｃ地点	八千代市大和田 322－17・18・ 19・20	12221	245	35 度 42 分 50 秒	140 度 6 分 35 秒	確認調査 20050310～20050318	225/1,514.03 拡張 107	医療施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東山久保遺跡 ｂ地点	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	古墳時代後期　竪穴建物跡２ 土坑１	縄文土器　フレイク 古墳時代　土師器	
小板橋遺跡 ｃ地点	集落跡	古墳時代 中世	時期不明　溝状遺構４ 土坑３	縄文土器(前期　繊維土器)他 弥生土器か 土師器 ガラス瓶	

要　約

東山久保遺跡　ｂ地点

調査区は小規模な舌状台地の付け根付近に位置し，古墳時代後期の竪穴建物跡２軒と同時期と推定される土坑１基が検出された。竪穴建物跡の規模にはやや差はあるが，同一方向に向いている。また，カマドのないものと増改築後に付設されたカマドをもつ建物の２軒であった。

台地の先端部分の大半で縄文時代から古墳時代後期までの集落が検出されたａ地点の続きと思われる。

小板橋遺跡　ｃ地点

調査区は小板橋遺跡の本体部分から離れ，台地先端部分に位置する。北北西-南南東方向に向かう溝状遺構が３条，北東-南西方向に向かう溝状遺構が１条，隅丸方形状の土坑が２基，円形状の土坑が１基検出された。

千葉県八千代市

不特定遺跡発掘調査報告書　VI

―東山久保遺跡ｂ地点・小板橋遺跡ｃ地点―

令和２年３月３１日発行

編　　集　八千代市教育委員会　文化・スポーツ課
千葉県八千代市大和田 138-2

発　　行　八千代市
千葉県八千代市大和田新田 315-5

印　　刷　金子印刷企画
千葉県八千代市萱田 410-1